

秋 月 遺 跡

向陽高校危険校舎改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 9 4 年 3 月

財団法人 和歌山県文化財センター

序

本遺跡が営まれた紀ノ川左岸の自然堤防周辺は、弥生時代の遺跡として著名な太田黒田遺跡や鳴神遺跡などがみられ、東には特別史跡岩橋千塚古墳群があり、古代名草郡の中心地と考えられているところでもあります。

このような歴史的環境にあって本遺跡は、昭和45年12月県道の建設工事中に発見されました。その後の調査で県立向陽高等学校校庭を中心として広がりを見せていることが明らかになり、昭和60年度には、前方後円墳や方墳が発見され一躍重要な遺跡として知られるところとなりました。

この度、当センターは、向陽高等学校危険校舎改築に伴い、本遺跡の発掘調査を平成4年から2箇年にわたり実施して参りました。

本書は、この2年間の発掘調査の成果をとりまとめ報告書として刊行するものであります。当地方の歴史をしるうえで一つの資料となれば幸いかと存じます。

最後になりましたが、調査にあたり御指導、御支援を賜った先生方や向陽高等学校の皆様方にたいし、改めて厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

財団法人和歌山県文化財センター

理事長 仮谷 志 良

例 言

- 1 本書は、和歌山市秋月に所在する秋月遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。調査地は、秋月 127（向陽高校校庭内）に位置する。
- 2 調査は県立向陽高等学校危険校舎改築事業に伴うもので、和歌山県の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに（財）和歌山県文化財センターが実施した。
- 3 現地調査は平成 4 年度と同 5 年度の二次に分けて実施した。第 1 次調査は 1993 年 1 月 27 日から 3 月 29 日で、調査面積は約 390 m² である。第 2 次調査は 1993 年 8 月 2 日から 9 月 2 日で、調査面積は約 60 m² である。その後引き続いて、報告書作成に伴う整理業務を行ない、1994 年 3 月 31 日をもって全てを完了した。
- 4 現地調査ならびに本書の作成は、（財）和歌山県文化財センター主査 土井孝之が担当した。
- 5 調査にあたっては、和歌山市教育委員会・県立向陽高等学校事務局ならびに地元の方々に多大なるご協力をいただいた。記して感謝する次第である。
- 6 調査・整理作業で作成した図面・写真および野帳・台帳等の記録類は（財）和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が各々保管している。
- 7 本書に掲載した遺物は膨大な量の中から任意に抽出したもので、各遺構の遺物を網羅するものではない。

凡 例

- 1 調査地区の地区割は、第 1 次調査区の南東隅に任意の基準点（0. 0）を設定し、磁北に対し N-3° 20' -W に振る基準線による割り付けを行なった。また、今後の調査にも対応するため、基準線を東側に平行移動させ、今回の調査地と体育館の間のアスファルト舗装通路に仮設点 4 点（第 7・17 図参照）をクロスネイル釘により「十」形に設置した。
- 2 本書に示した北方位は磁北で、標高は東京湾標準潮位（T. P. +）の数値である。標高は、市立日進中学校校庭内（和歌山市秋月 365-3）に設置されている和歌山市水準点（和歌山市都市計画部）59-02（標高 4.127m）を利用して算出したものである。
- 3 本書に示した土層名・土質の色調は調査担当者が任意の判断で呼称したものである。
- 4 調査・本書に使用した遺構の略号は、SE-井戸、SK-土坑・土墳墓、SD-溝、SX-甕棺墓、P-柱穴である。遺構番号は、その種類に係らず年度毎に 1 番からの通し番号とし、本文中において 2 次調査の遺構番号には「2 次」を冠している。本書に使用した遺構番号は、現地調査時のものをそのまま使用した。
- 5 調査・整理作業で使用した調査地のコード番号は、各々 92-01・331（1992 年度-和歌山市・秋月遺跡）、93-01・331（1993 年度-和歌山市・秋月遺跡）である。
- 6 本書の遺構・土層実測図は、特に縮尺を統一していない。遺物実測図は、特別なものを除いて 1/4 の縮尺である。
- 7 本書で使用した遺物番号は、本文・遺物実測図・写真図版すべてに共通する。遺物の内 300 番台は、写真図版のみに掲載したものである。写真図版に収録した遺物は、特に縮尺を統一していない。
- 8 挿図に示した「遺物取り上げ対応層位」は、現地調査での遺物取り上げに際して付した層位で第…層で表している。本文中における第…層の表現は、土層図の 1. 2. 3……を示したものである。

目 次

I	調査の経緯	1
II	位置と環境	2
1	地理的環境	2
2	歴史的環境	2
III	調査の成果	4
1	調査の方法	4
2	基本層序	5
3	検出遺構と出土遺物	5
(1)	第三遺構面(下面)	5
(2)	第二遺構面(中面)	12
(3)	第一遺構面(上面)	21
IV	ま と め	22

図 版 目 次

図版一	1	遺跡遠景	2	井戸S E 116竹出土状況
	2	調査前の状況	3	井戸S E 128
図版二	1	第三遺構面全景	図版八	1 土坑S K 6
	2	甕棺墓S X 5	2	土坑S K 6 土層
	3	甕棺墓S X 5	3	土坑S K 6 遺物出土状況
	4	土坑S K 100	4	土坑S K 6 石鍋出土状況
	5	土坑S K 100土層	図版九	1 2次第三遺構面全景
図版三	1	方墳1	2	2次井戸S E 36
	2	方墳1周溝S D 106内土坑	図版十	1 2次第二遺構面全景
図版四	1	方墳2	2	2次溝S D 3 遺物出土状況
	2	土坑S K 115	3	2次溝S D 3 土層
	3	土壇墓S K 142	4	2次溝S D 7 土層
図版五	1	溝S D 62西端遺物出土状況	図版十一	出土遺物
	2	第二遺構面東側半分の遺構検出状況	図版十二	出土遺物
図版六	1	井戸S E 7	図版十三	出土遺物
	2	井戸S E 7 井側内細部	図版十四	出土遺物
	3	井戸S E 7 井側内細部	図版十五	出土遺物
	4	井戸S E 7 曲物製釣瓶出土状況		
図版七	1	井戸S E 116石組み		

挿 図 目 次

第1図	秋月遺跡とその周辺	3
第2図	調査区位置図	4
第3図	調査区基本層序図	5
第4図	2次井戸S E 36実測図	6
第5図	土坑S K 100・柱穴P 118実測図	6
第6図	第三遺構面（下面）調査遺構全体図	7・8
第7図	調査遺構位置関係図	7・8
第8図	甕棺墓S X 5実測図	9
第9図	方墳1実測図	10
第10図	方墳1周溝S D 106内土坑実測図	10
第11図	方墳2実測図	11
第12図	土壌墓S K 142実測図	12
第13図	土坑S K 171・2次土坑S K 5実測図	12
第14図	溝S D 62実測図	13
第15図	2次土坑S K 41・S K 42実測図	14
第16図	第二遺構面（中面）調査遺構全体図	15・16
第17図	調査遺構位置関係図	15・16
第18図	溝S D 9・2次溝S D 3・S D 7土層図	17
第19図	2次土坑S K 25実測図	17
第20図	井戸S E 7実測図	18
第21図	井戸S E 128実測図	19
第22図	土坑S K 6実測図	20
第23図	第一遺構面（上面）調査遺構全体図	21
第24図	2次溝S D 3出土遺物実測図	22
第25図	出土遺物実測図1	23
第26図	出土遺物実測図2	24
第27図	出土遺物実測図3	25
第28図	出土遺物実測図4	26
第29図	出土遺物実測図5	27
第30図	出土遺物実測図6	28
第31図	出土遺物実測図7	29
第32図	出土遺物実測図8	30
第33図	出土遺物実測図9	31
第34図	出土遺物実測図10	32

I 調査の経緯

秋月遺跡の現状は、日前宮神社境内・県立向陽高校・市立日進中学校・市立日前幼稚園敷地ほかとなっている。今回の調査地の存在する県立向陽高校の敷地は、1904年に県立海草農林学校、1915年に県立海草中学校、1948年に現在の県立向陽高校となっている。例外なく、この周辺部も急速に宅地化が進んでいる地域である。

秋月遺跡では、下表に示した過去数次の調査において様々な成果を得ている。既往の調査において最も注目されるのが、1985年度に行われた県立向陽高校の特別教室建築に伴う調査（県Ⅱ1）での、県内最古に位置付けられる前方後円墳の発見である。前方後円墳と共に相前後する時期の方墳も発見されており、当該地周辺が古墳時代に墓域であったことが明らかにされている。また、奈良時代から室町時代にかけても集落に伴う数多くの遺構・遺物が発見されている。このような重要性から、今回の調査も改築工事に先立って遺跡の取扱いについて事前に協議が成されたところである。

今回の調査は、県立向陽高校の老朽化した危険校舎の改築に伴うものである。調査位置は、第1次調査（県Ⅴ）が1985年度調査地の北側約15mと近接した位置と、第2次調査（県Ⅵ）が1985年度調査地と第1次調査地の間をつなぐ渡り廊下部分である。当然、既往の調査と関連する遺構の存在が十分に予測されていた地点である。

秋月遺跡における既往の調査一覧 〈県関係の調査〉

調査年度	調査の原因・種類	面積	調査主体	文 献	発 行	文献発行年月
I	1970 県道和歌山港鳴神線建設	約240㎡	和文研	『秋月遺跡』『和歌山県史 考古資料』	和歌山県	1983. 2
Ⅱ 1	1985 県立向陽高校特別教室建築	約1,000㎡	〃	『秋月遺跡発掘調査現地説明会資料』 『 〃 』 『和歌山県秋月遺跡』『日本考古学年報38』	和文研 〃 日本考古学協会	1985. 9 1986. 2 1987. 4
Ⅱ 2	〃 〃 合併浄化槽建設	約190㎡	〃			
Ⅱ 3	〃 〃 排水施設埋設立会	約400㎡	〃			
Ⅲ	1986 〃 硬式テニスコートボール基礎 〃 軟式テニスコートボール基礎	グリッド6ヶ所 グリッド6ヶ所	県教委 〃			
Ⅳ 1	1987 〃 ラグビーゴールボール基礎	グリッド2ヶ所	〃			
Ⅳ 2	〃 〃 グランド整備・排水施設	約530㎡	〃			
Ⅳ 3	〃 〃 グランド北西隅砂場	約120㎡	〃			
Ⅳ 4	〃 〃 バレーコートボール基礎他	グリッド5ヶ所	〃			
Ⅳ 5	〃 〃 北西隅テニスコートボール基礎	グリッド8ヶ所	〃			
Ⅳ 6	〃 〃 グランド内グリッド	グリッド9ヶ所	〃			
V	1992 〃 危険校舎改築1次	約390㎡	和文セ	『本報告書にて記述』	和文セ	1994. 3
Ⅵ	1993 〃 〃 2次	約60㎡	〃	『 〃 』	〃	〃

〈市関係の調査〉

I	1985 市立日進中学校自転車置場建設	約72㎡	市教委			
Ⅱ	1986 〃 クラブ部室建設	約60㎡	〃			
Ⅲ	1987 市立日前幼稚園 建設	約 ㎡	〃			
Ⅳ	〃 市立日進中学校体育倉庫建築	約70㎡	〃	『秋月遺跡現地説明会資料』	市教委	1987. 10
V	1988 〃 下足箱建設	グリッド2ヶ所	〃			

和文研一(和歌山県文化財研究会、県教委一和歌山県教育委員会、和文セ一(和歌山県文化財センター、市教委一和歌山市教育委員会

Ⅱ 位置と環境

1 地理的環境（第1図、図版一）

秋月遺跡（331）は、和歌山市市街地の東部紀ノ川の自然堤防上に立地した弥生時代前期から中世にかけて営まれた複合遺跡である。今回調査の対象となった秋月遺跡は、JR和歌山駅の南東約1kmに鎮座する日前宮を中心として拡がり、和歌山県下では最も拓けた和歌山平野の紀ノ川左岸に位置している。

紀ノ川左岸の和歌山平野は、地形分類から見ると沖積Ⅱ面と沖積Ⅲ面に区分されている。当地域は、紀ノ川による土砂の堆積作用が最も早く進んで陸地化していったものと考えられており、古くから安定した立地にあった所である。紀ノ川の本流によって形成されたと考えられる地理的分野からすれば、秋月遺跡は沖積Ⅱ面の上位面に存在することになる。この沖積Ⅱ面の上位面とされる地形には、県下では最大規模を誇る弥生時代の太田黒田遺跡（327）を初め、津秦遺跡（332）・鳴神Ⅴ遺跡（318）が所在し、上位面から北側や南側の下位面とされる地形にかけても鳴神Ⅴ遺跡（318）・鳴神Ⅱ～Ⅳ遺跡（314～316）・音浦遺跡（319）などの弥生時代から室町時代にかけての諸遺跡が密に所在している。このように、当地域は諸遺跡（諸集落）を育む肥沃な地理的環境にあったことは想像に硬くない。

参考文献 額田雅裕「太田城付近の地形環境」『和歌山市立博物館研究紀要2』1987年

2 歴史的環境（第1図、図版一）

地理的環境でみたように、秋月遺跡の所在する自然堤防上および周辺には数多くの遺跡が分布し、県下での原始古代から中世に至る中枢部の様相を呈している。周辺部の遺跡について、簡単に触れておくことにしたい。

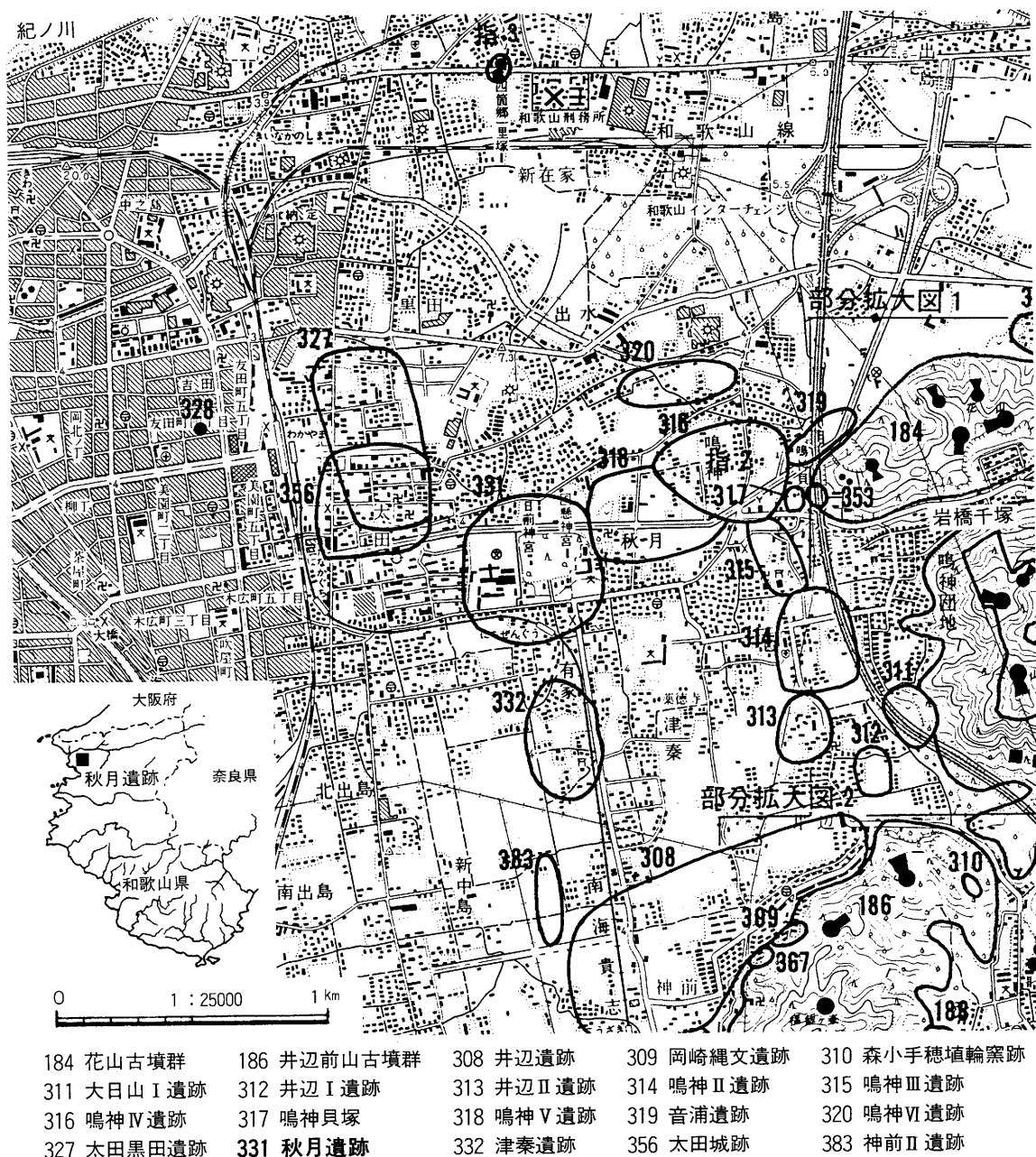
先土器時代から縄文時代の遺跡は、紀ノ川左岸の平野部では見つかっていない。先土器時代の遺跡は、やや山間に入った地域（山東大池遺跡）や丘陵台地（鳴滝遺跡）などの少し平野から離れた場所に存在している。縄文時代の遺跡は、和歌山市東部の丘陵から緩やかに延びる斜面（鳴神貝塚・禰宜貝塚・吉札貝塚）や裾部（岡崎縄文遺跡）において若干存在している。鳴神貝塚（317）は、西日本で初めて発見された貝塚として早くから知られ、国史跡となっている。

弥生時代では地形の陸地化を端的に立証するかのように、太田黒田遺跡や秋月遺跡では弥生時代前期中頃以後でないと遺構や遺物が認められない。当地域において弥生時代の集落の拡がりを把握できるのは、開発の多い地域であるにも拘らず、県下で最大規模の拠点集落として位置付けられる太田黒田遺跡だけである。鳴神Ⅳ遺跡や神前遺跡でも若干の遺物が認められるが、面的な

掘がりを捉えることはできない。

古墳時代には和歌山市東部の丘陵上に、全国的にも著名な古墳群である岩橋千塚古墳群（花山古墳群184・井辺前山古墳群186など）が形成されている。当然のことながら、今回の調査の対象地となった秋月遺跡や鳴神Ⅱ～Ⅳ遺跡・音浦遺跡で確認されている集落や墓の存在と有機的な関連を有する古墳群である。また、鳴神Ⅱ～Ⅳ遺跡・音浦遺跡などの鳴神地区遺跡群は紀ノ川河口部の開発と関りをもつ集団の集落として位置付けることが可能であろう。

それ以後も、秋月遺跡の中に鎮座する日前宮との関係、中世においては雑賀党や太田党などの諸勢力と関係する城館の存在からも、秋月遺跡周辺部で様々な遺跡が展開するところである。



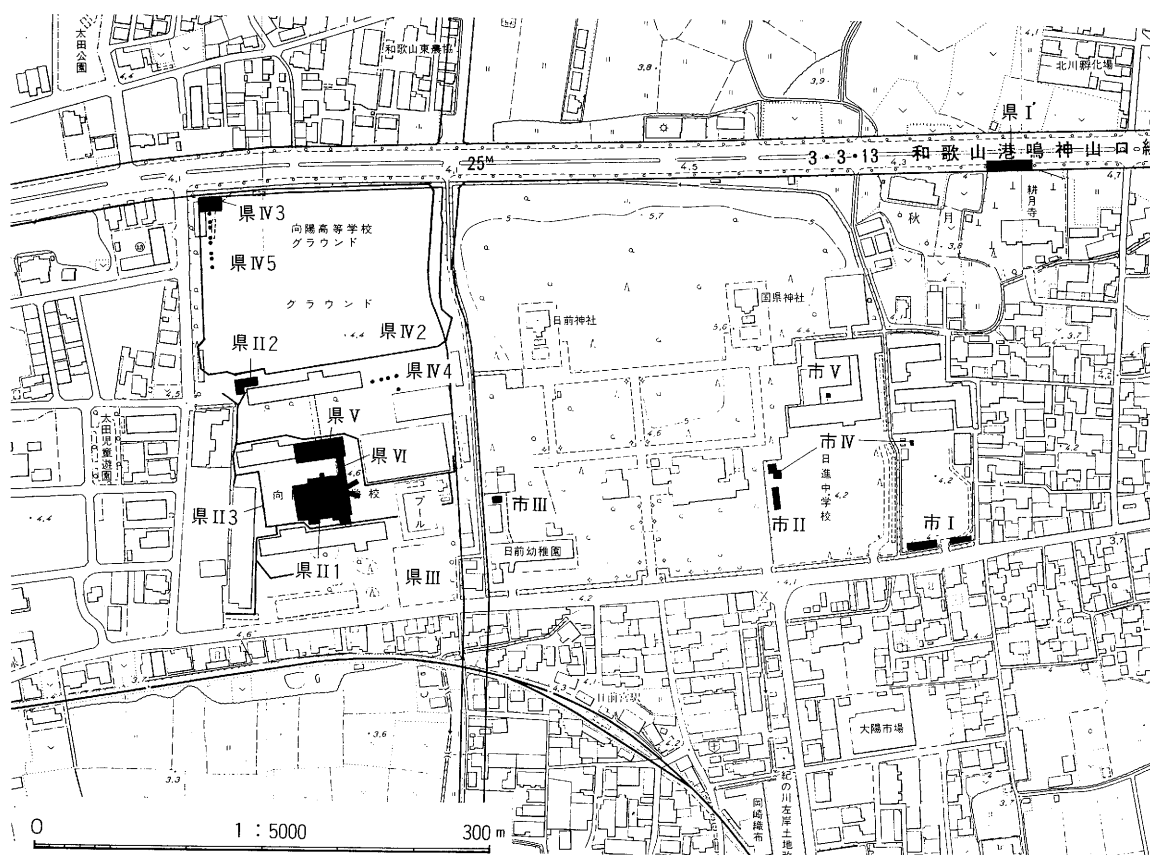
Ⅲ 調査の成果

1 調査の方法（第2・3図、図版一）

地点名称は、凡例に示した基準点より東はE、西はW、南はS、北はNを冠し、これに基準点からの距離で表示した。調査地区に設定した方4mの小区画は、各々の北東隅の距離をもって呼称することにした。また、調査の一連の作業に併せて、調査地周辺の平板測量図を縮尺1／500で作成した。以下、年度毎に分けて記述する。

第1次調査（平成4年度） 調査は、北側の污水槽と南側の排水溝等の関係から前述した構造物の範囲約430㎡の内の約390㎡について行なった。掘削作業は、遺物量の多い第2・3層の一部と第4層の大部分、そして以下を人力により掘削排土し作業を進めた。これら以外の上層の整地土等は、機械掘削による排土を行なった。途中、予想を上回る遺物量と掘削土量に圧倒された。

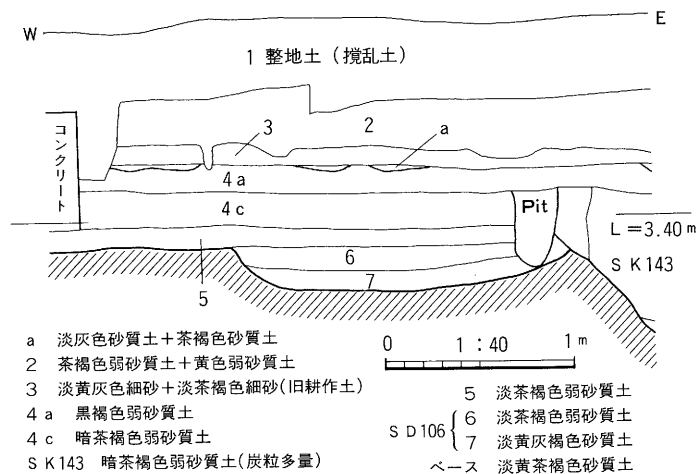
第2次調査（平成5年度） 調査区の南端では昭和60年度調査地と一部重複しており、実質的な調査面積は若干減少している。掘削作業は、第1次調査と同様に多量の遺物を含む第2層の一部と第4層以下を人力により掘削排土し作業を進めた。途中、度重なる悪天候やその後の湧水（既往の調査地の盛土の下に溜った水）に悩まされたが、一応の成果を納めることができた。



第2図 調査区位置図

2 基本層序 (第3図)

第1層は、整地土および校舎撤去後の建物基礎の攪乱土である。第2層は、磨滅した状態の遺物が多量に出土し、色調・土質が第4層に酷似する土砂が主体を占めるため近接地ないしは当調査区周辺の第4層が第3層の上に盛られたものと考えられる。第3層は、遺物が比較的少なく江戸時代～明治の耕作土と考えられ



第3図 調査区基本層序図

る。第4層は、平安時代末～室町時代初頭の遺物を多量に包含する層で、昭和60年度調査地から当調査区の南西側にかけて集中する傾向がある。もう少し詳細にみると、第4層はa層～c層の三層に区別することができ、第4 a層は室町時代初頭の、第4 c層は平安時代末の、第4 b層はその途中の時期の整地層と考えられる。本来、今回検出した掘立柱建物の一部や土坑S K 6などは第4 a層除去面から掘削されていたものと考えられる。第5層は、古墳時代の遺物を包含する層で、遺物量は第4層とは対照的に少ない。ベースは、大別して調査区の西半と東半で異なり、東側ほど砂質になる。

遺構検出面の高さは、全体に西側と南側ほど低くなる傾向にあり、大別して三面に分けることができる。

3 検出遺構と出土遺物

第一遺構検出面（上面）は、旧耕作土を除去した面での室町時代初頭以後の土坑・溝および近代から旧校舎建築以前の畑の畝跡・ゴミ捨て穴などが、第二遺構検出面（中面）では奈良時代～室町時代初頭の掘立柱建物・井戸・土坑・溝などが、第三遺構検出面（下面）では庄内式併行期の井戸・溝、古墳時代の方墳・溝・甕棺墓・土墳墓・土坑などが存在する。

遺物は各時代の遺構・遺物包含層から大量に出土している。大半は、土師器・須恵器・瓦器などの土器類で占められ、通常の遺物収納コンテナにして約300箱分ある。調査の進行上、第2層に多量に包含する遺物の大半は放棄せざるを得なかった。

以下、第1次調査と第2次調査を併せて時代の古い検出遺構・出土遺物から順に記述する。

(1) 第三遺構面（下面）(第6・7図、図版二・九)

第三遺構面での遺構は、その重複関係と出土遺物からみて四時期に大別することができる。

庄内式併行期

2次井戸S E 36 (第4・25図、図版九・十一) 掘り込みは検出面で径1.3mを測り、円形を呈する。断面形はラッパ状に開き、深さ2m以上、径0.55mを測る。埋土は、上層(第1～4層)がレンズ状に落ち込み、遺物量が最も多い。次いで、下層(第5～7層)に遺物が多く、若干レンズ状に落ち込む。最下層(第8層)では、遺物量も少なくなり、灰色粘質土が堆積している。遺物は壺(1～4)・甕(5～8)・高坏(11・12)・鉢(9・10・13・14)などがあり、河内庄内甕の小片が認められる。上層から最下層まであまり時期差がないと考えられ、埋土堆積は庄内式併行期の短期間に埋没したものである。

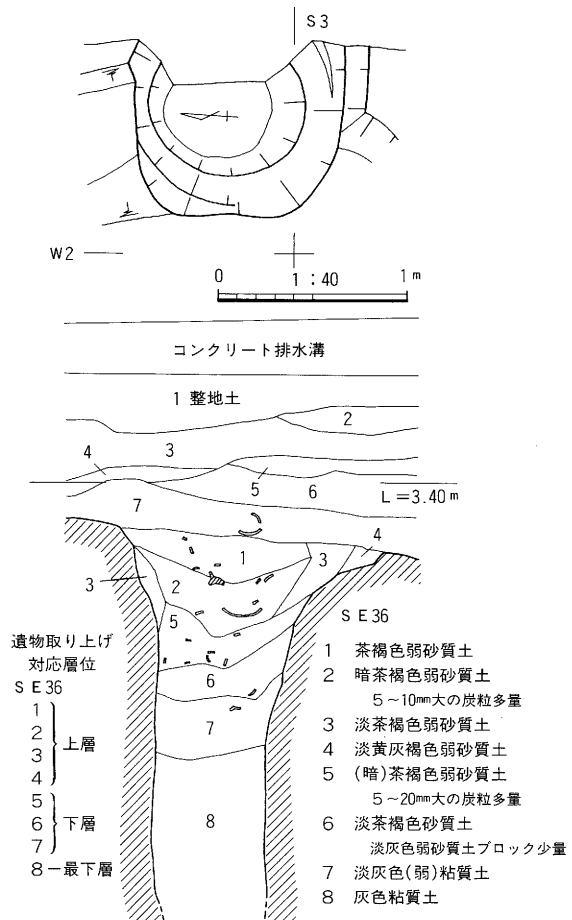
溝S D 101 調査区を北東から南西にかけて斜めに横切る幅0.75m、深さ5～10cmの浅い溝で、延長22m分を検出した。遺物は壺・甕底部・河内庄内甕・粗い胎土の甕の破片が少量出土している。平面検出時には、S D 105・106・S K 142との関係を明らかにできなかったが、遺物から何れの遺構よりも古いものと考えられる。

溝S D 105・126・127 調査区を北西から南東にかけて斜めに横切る幅0.7～1m、深さ20cmの溝で、延長11.5m分を検出した。他遺構との重複が著しく、溝そのものの遺存状態はあまり良好でない。遺物は庄内式併行期の甕が多く、二重口縁壺・高坏などが少量出土している。

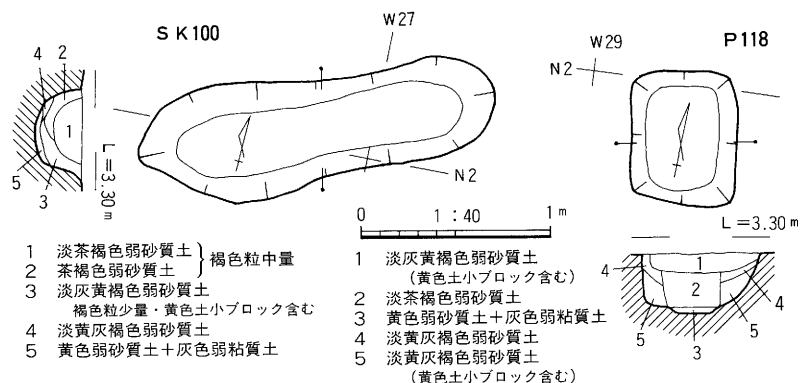
布留式併行期

布留式併行期とした土坑や柱穴の中には、庄内式併行期に遡り得るものがあるかもしれない。

土坑S K 146 一部がS D 109・113に削り取られる。平面形は長方形を呈し、長

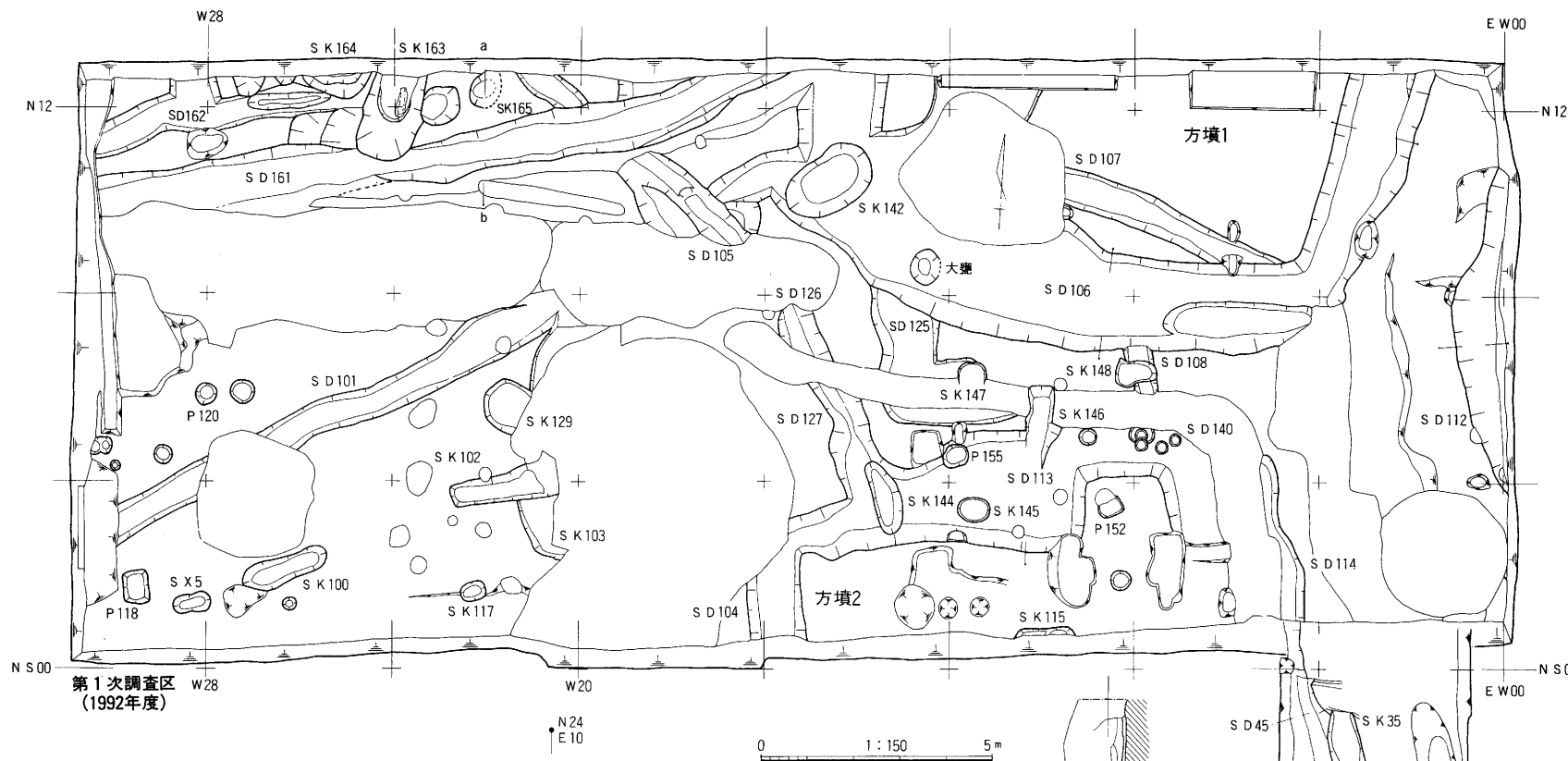
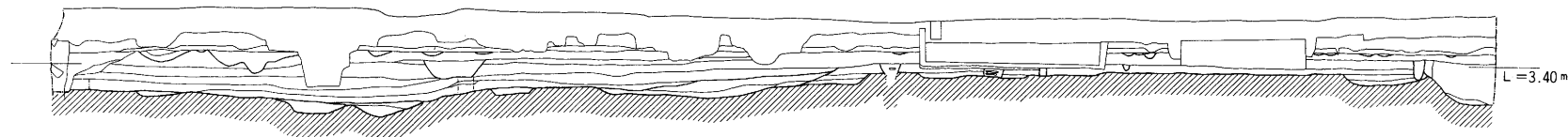


第4図 2次井戸S E 36実測図

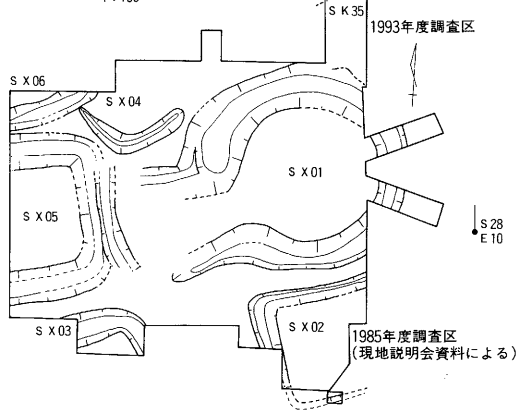
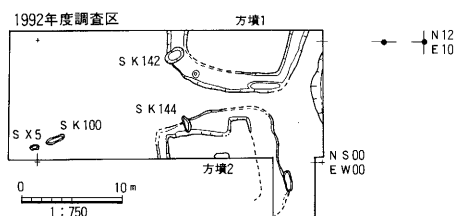


第5図 土坑S K 100・柱穴P 118実測図

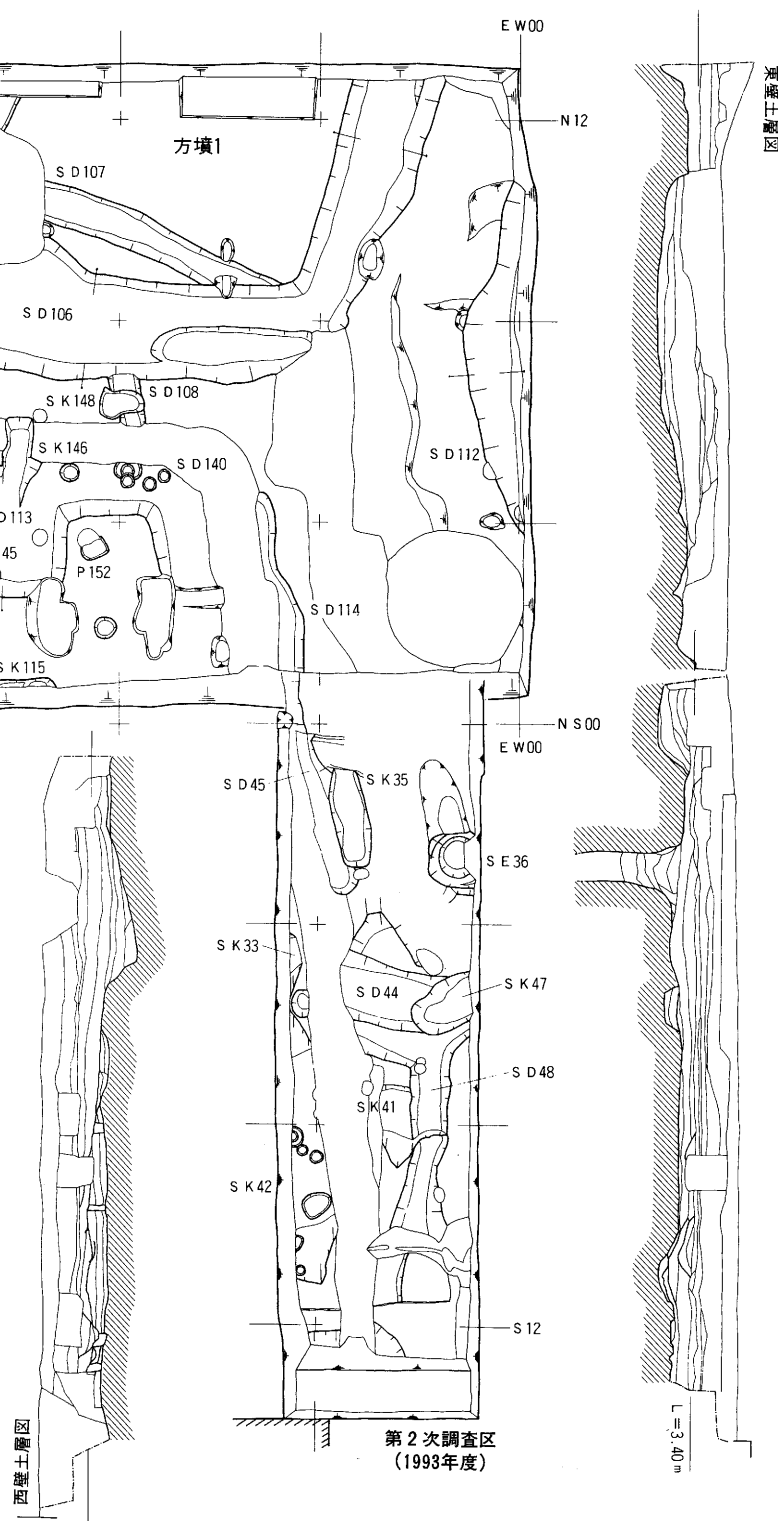
北壁土層図



第1次調査区
(1992年度)



第7図 調査遺構位置関係図



第2次調査区
(1993年度)

第6図 第三遺構面(下面)調査遺構全体図

軸1.8m、短軸0.8m、深さ50cmを測る。遺物は出土していない。

土坑S K 147 平面形は方形を呈するものと考えられ、東西0.6m、深さ40cmを測る。遺物は土師器の小片が微量出土している。

土坑S K 148 一部がS D 108に削り取られる。平面形は楕円形を呈し、長軸0.9m、短軸0.75m、深さ40cmを測る。遺物は土師器の小片が少量出土している。

柱穴P 118 (第5図) 調査区の南西隅にあって方形を呈し、南北0.7m、東西0.62m、深さ30cmを測る。遺物は平底の甕底部・壺・布留式甕の小片が微量出土している。

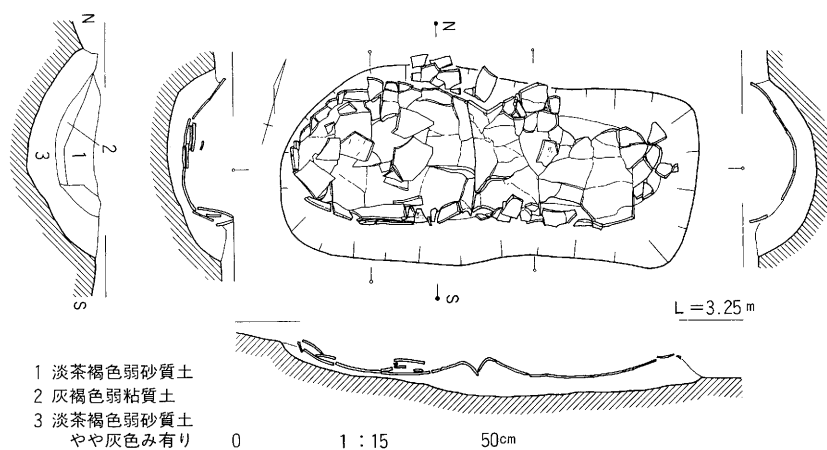
古墳時代中期～後期

土坑S K 100 (第5図、図版二) 平面形が東西に長い楕円形を呈し、長軸1.9m、短軸0.5m、深さ25cmを測る。遺物は古墳時代の土師器壺・甕、須恵器の小片が1片出土している。平面形、規模、埋土の状況から土壌墓の可能性が考えられる。

甕棺墓S X 5 (第8・

26図、図版二・十二)

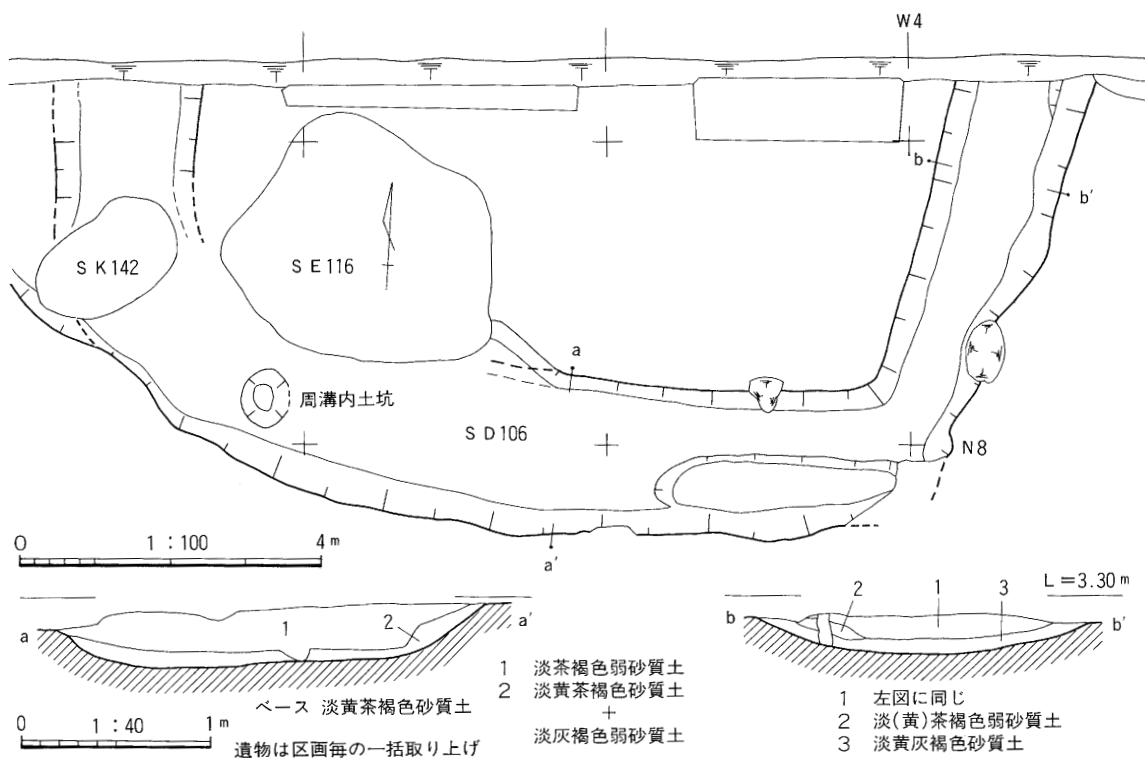
調査区の南西隅にあって、上半の一部が校舎の基礎部分の掘削によって削り取られていた。検出状況から判断して、甕を横たえるに際しやや大きめの掘形を掘削し、安定をよくするため第3層を充填している。甕の内底には



第8図 甕棺墓S X 5実測図

厚さ2mm前後の灰色粘質土が堆積し、その後はほとんど土砂が流入していない空洞状態で土圧等により上半部が陥没し、第2層が堆積したものと考えられる。遺物は長胴形態の甕が2個体(22・23)横たえられており、形態・技法の特徴から5世紀後半～6世紀初頭にかけて埋設されたものと考えられる。

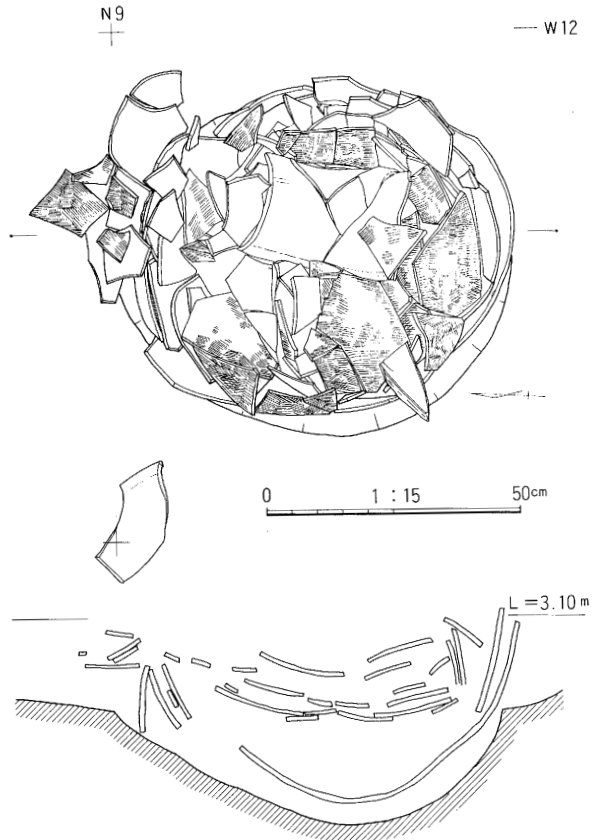
方墳1 (第9・26図、図版三・十二) 方墳の周溝を検出したに留まる。周溝の内辺で東西9.5～10m、外辺で約13mを測る。主軸方位はN-10°-Eに振る。周溝は南辺で幅2.2m、深さ35cm、東辺で幅1.7m、深さ20～25cmを測り、南辺の東側の一部で更に凹む状態になっている。遺物は東辺周溝から須恵器甕(27)、土師器甕・高坏などが出土しているが、完全な形で出土したものは甕と後述する須恵器大形甕(28)のみである。須恵器坏身(25)、坏蓋(24)などの破片は、周溝埋没の過程で入り込んだものと考えられ、庄内式併行期の遺物も数多く見受けられる。



第9図 方墳1実測図

周溝S D 106内土坑（第10・26図、図版三・十一）

土坑の掘形は、南北0.8m、東西0.6m、深さ25cmを測る。須恵器の底部は土坑の底に埋め置かれた状態で、胴部から口縁部にかけての大半の破片は破碎した状態で内側に落ち込んでいた。口縁部の一部は、本体からやや離れた西側で検出されている。大形甕（28）は、口径43～44.5cm、高さ103cm、胴部最大径は胴部中位に位置し76cmを測る。肩部には、対になる乳状突起が一对付加されている。底部の一部には、焼成時の当て物による焼き歪みにより大きく凹み亀裂を生じている。口縁部から肩部にかけて、薄い灰緑色の自然釉が一部まばらにかかっている。頸部外面下位には12本/cm程度のハケ目が、胴部外面は横方向の平行タキが施されタキの重なり部分のみナデ



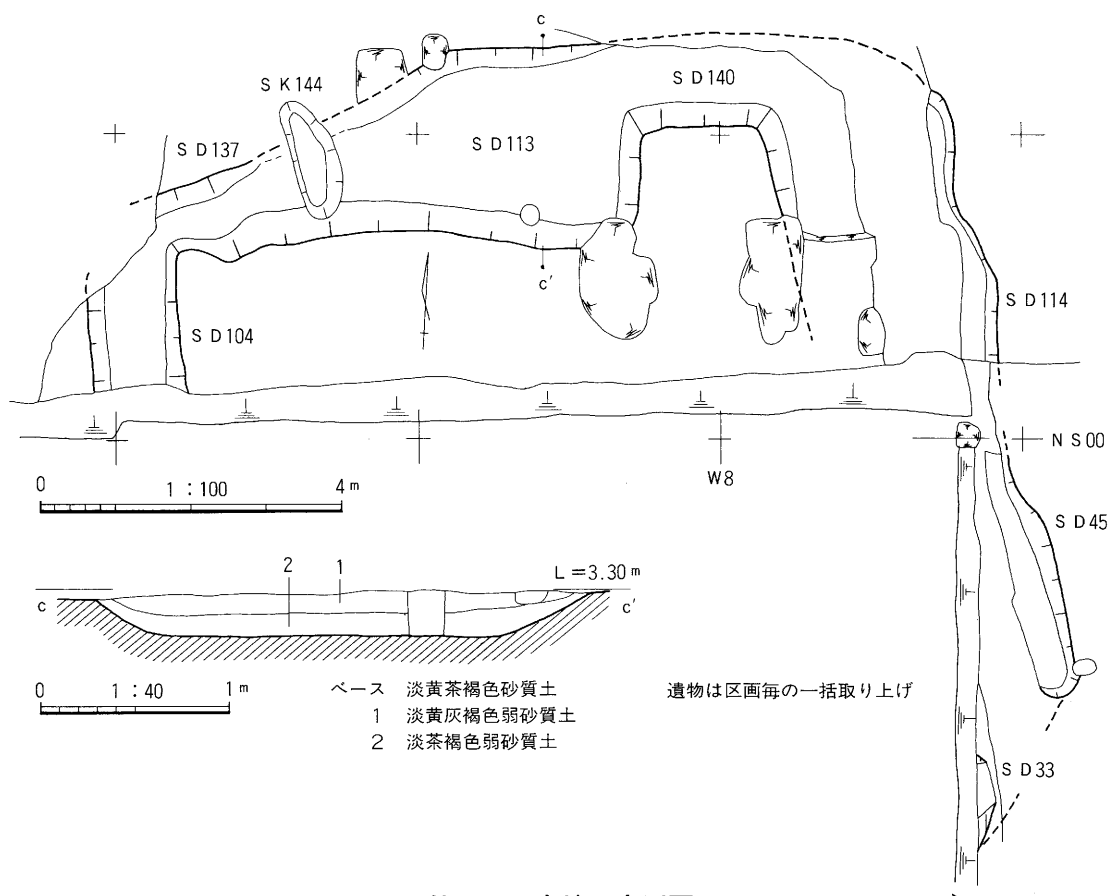
第10図 方墳1周溝S D 106内土坑実測図

る。胴部内面はナデ調整しているが、僅かに同心円文が、底部内面に絞り目痕跡が残っている。胎土には1mmまでの白色砂粒を僅かに含み、色調は灰白色みを呈している。焼成はやや軟質の状態にみえる。

方墳2（第11・25図、図版四・十一） 方墳の周溝の北東域を検出したに留まる。他遺構との重複が著しく、周溝そのものの遺存状態は良好とはいえない。方墳2の規模は、周溝の内辺で東西7.8～8.2m、外辺で約12mを測る。周溝は北辺で幅1.6m前後、深さ25cm、東辺で幅2.4m、深さ約10cm、西辺で幅1.2m、深さ20cmを測り、北辺で東側に東西1.8m、南北1.6mの張出しが認められる。主軸方位はN-7°-Wに振る。遺物は西辺周溝（SD104）から土師器鉢（15）、須恵器甕・甕などが出土している。また、今回の調査で唯一弥生時代前期と考えられる甕底部（16）も出土している。

土坑SK115（図版四） 方墳2の南側で、調査区の南壁に接して位置する。掘形は二段になり、長軸1.4m、幅0.2m以上、深さ30～70cmを測る。遺物は土師器甕の破片が出土している。

溝SD112 検出幅1.1m、深さ約70cm、延長9m分を検出した。埋土は他の古墳時代の遺構と異なり、灰褐色砂質土が堆積していた。遺物は庄内式併行期の甕・高坏、須恵器蓋・甕と共に12世紀中頃の土器を若干含んでいる。東壁土層と出土遺物から、古墳時代と異なる可能性もある。



第11図 方墳2実測図

溝 S D 125・108 S D 125は幅1.2m、深さ約10cmで「L」字状に折れ曲がり、S D 108と対応位置にあって方形の区画を成すものと考えられる。方形の内辺で約4 mを測り、北辺はS D 106の掘り過ぎた部分（S E 116の東側）に対応する可能性がある。遺物はS D 125から須恵器坏蓋・壺などの小破片が微量出土しているに過ぎない。

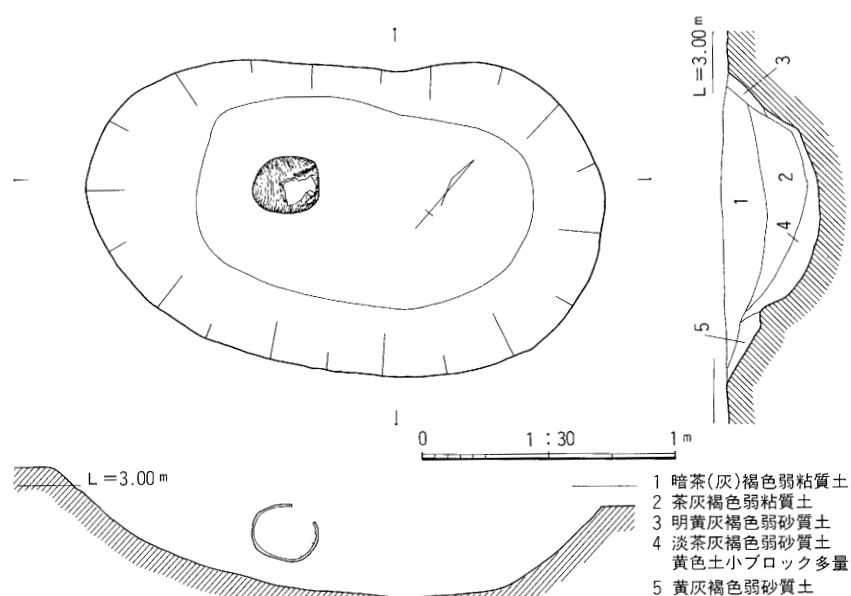
土坑 S K 163 S D 62の底面で検出した。隅丸長方形を呈し、長軸1.95 m以上、短軸1.15 m、深さ30 cmを測る。土坑のほぼ中央に長さ50 cm、幅20 cmの扁平な板石（結晶片岩）が横たえられていた。遺物は土師器甕・埴が少量出土している。調査区北壁の土層観察からS K 163よりS K 164が古く、遺物から6世紀後半から7世紀前半と考えられる。

土坑墓 S K 142（第12・25図、図版十二） S D 101・106と重複する位置にある。長軸2 m、短軸1.2 m、深さ50

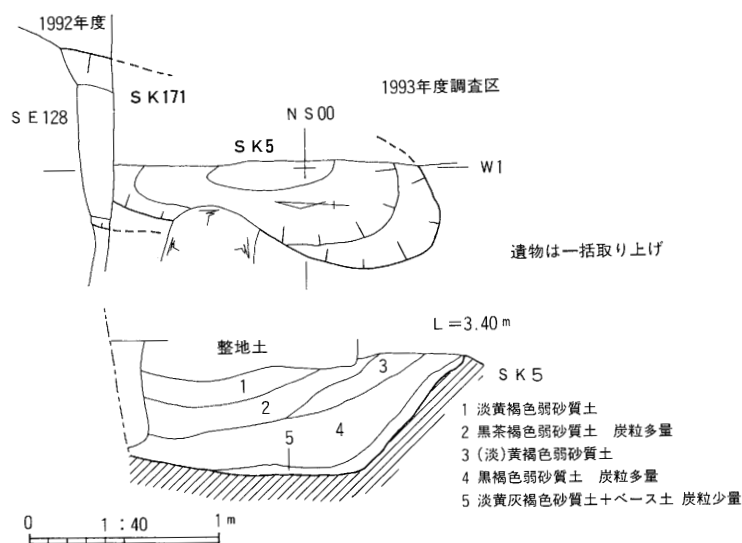
cmの土坑で、本来、S D 106埋土の上面から切り込まれたものと考えられるが、S D 106埋土掘削後に検出するに至った。埋土の第4層は、ベース土が多量に混入し人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は庄内式併行期の壺・甕の小破片を含むが、土坑の基底部から約10 cm浮いた状態で、口縁部を欠く横瓶（21）が横たえられた状態で出土した。

（2）第二遺構面（中面）（第16・17図、図版五・十）

第二遺構面での大半の遺構は、基本堆積層第4層除去面（第5層上面）において検出したものである。



第12図 土坑墓 S K 142実測図

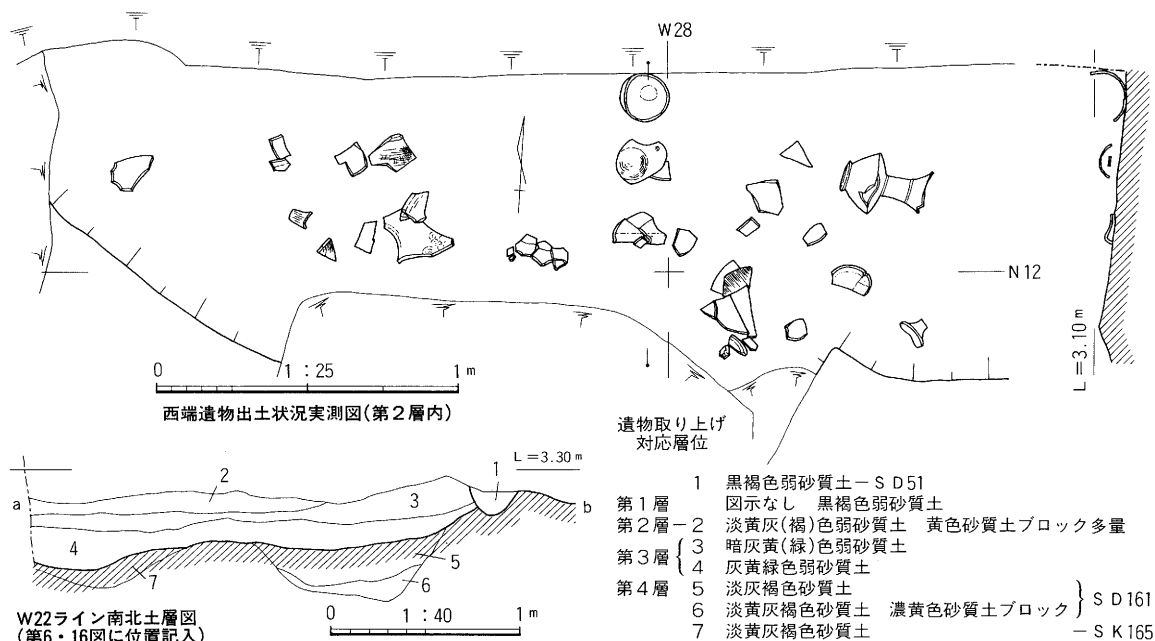


第13図 土坑 S K 171・2次土坑 S K 5実測図

奈良時代

土坑S K 171・2次土坑S K 5（第13・27図、図版十二） 1次・2次の両調査区にかかる土坑で、長軸2 m、短軸0.9 m以上、深さ65 cmで、南北に長い楕円形を呈する。埋土は、炭粒を多量に含む第2・4層で構成される特徴があり、締まりのない堆積土である。遺物は第4層からの出土が多く、比較的まとまりのある土師器甕（35）・埴（36）・竈・製塩土器・須恵器坏（30・31）・蓋（33・34）などがあり、平城宮Ⅰ期に併行するものと考えられる。

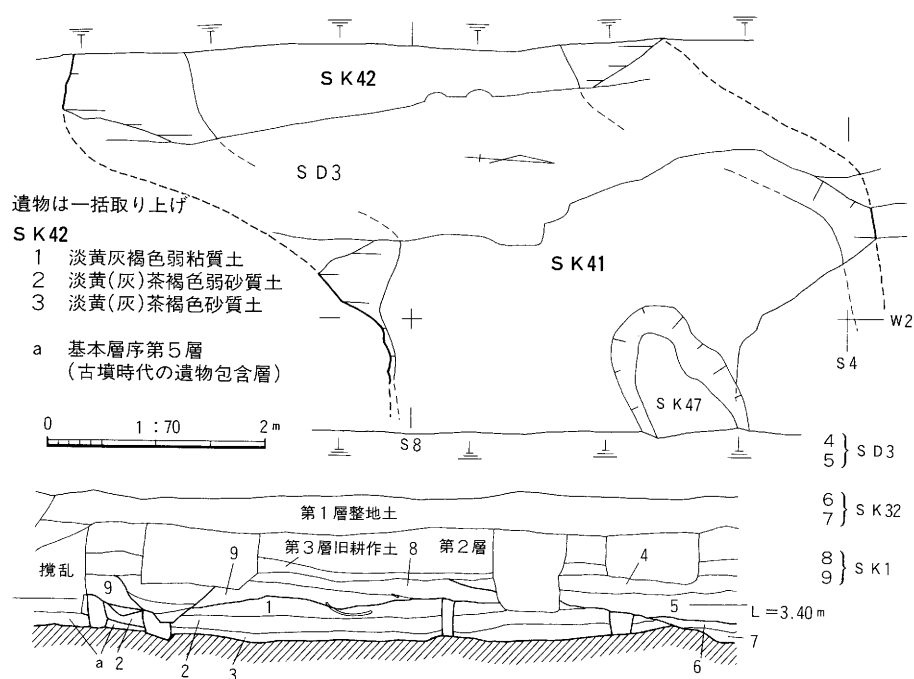
溝S D 62（第14・27・28図、図版五・十二・十三） S D 161やS K 163～165上に重複して位置し、東北東から南南西に延びる溝である。検出最大幅は3 m、深さ40～60 cm、延長15 m分を検出した。埋土は、大きく3層に分けることができる。第1層は土層図に示していないが上層部分やある一部で中世遺物を若干含む。遺物は全層平均して出土量が多く、平面的にも検出した溝内全域にわたって出土する（収納コンテナ27箱分）。第2層下部では図示したような完形品や大振りの破片の出土がみられ、ある時期第4層上面（第3層は部分的な堆積）に面的に投棄した状況が伺えられる。また土器類と共にW20～28の広範囲にかけて獣骨（馬）が出土している。遺物は、下部に存在する6世紀末～7世紀にかけての遺構の遺物と考えられるものがかなりの量で混っている。土師器では皿（37・38）・蓋・高坏（39～41）・甕（42～46）・埴・竈、須恵器では皿（47）・坏A（48～54）・坏B（55・56）・蓋（57・58）・高坏（60）・長頸壺（63）・横瓶・提瓶（64・65）・平瓶（62）・甕（66～71）、鉄釘などが出土している。遺物の全体の傾向として土師器では皿・蓋・高坏が少なく、甕・埴が非常に多い。須恵器では甕が最も多く、次いで坏A・坏Bが多く、蓋・高坏・壺・横瓶などは少ない。S D 62の本来の遺物は、平城宮Ⅰ・Ⅱ期に併行するものと考えられる。



平安時代～室町時代初頭

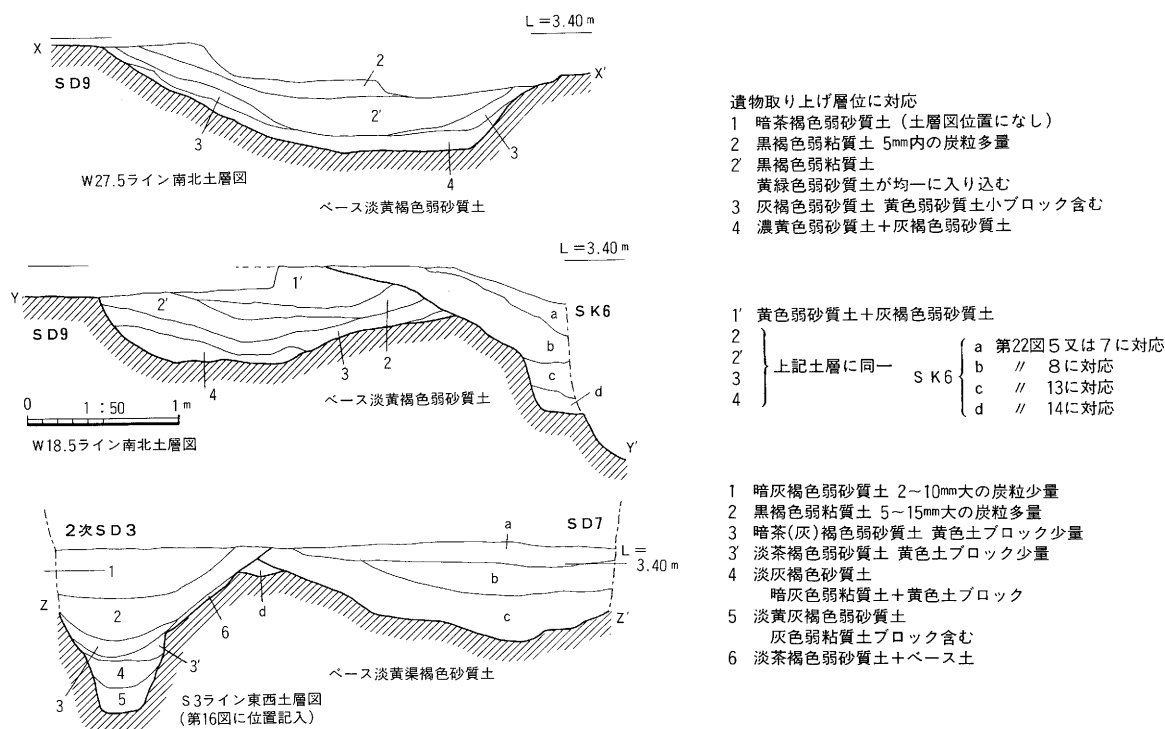
2次土坑S K41・42（第15・26・28図、図版十一） 新しい時期の遺構の掘削により平面形は明確でないが、南北5.4m、深さ40cmで東西方向に延びる土坑状の遺構である。調査時には須恵器壺（29）の破片がS K41・42に散らばっていることから古墳時代の遺構と考え掘削していたが、遺物・土層を検討した結果、平安時代の遺構と判断するに至った。古墳時代の遺構であれば基本層序第5層の除去面での検出であるが、S K42は第5層に掘り込まれている。遺物は奈良時代の土器を少量含む

が、主体は多段ナデ手法を伴う土師器碗（72・73）・皿（74）・黒色土器B類碗などの10世紀末～11世紀初頭のものである。すると、ほぼ完形で折り重なって出土した（西壁へ入り込む）須恵器壺（29）が、どの遺構に伴うものか判断し難い。



第15図 2次土坑S K41・S K42実測図

溝S D9（第18・29図、図版十三） 他遺構との重複が著しいが、幅約3m、深さ75cmで、延長16m分を検出した。掘り込みは南側が緩やかで、北側がやや傾斜の強い状態にある。W20～22付近で、底面の深さが両側より約30cm浅くなる部分が存在する。埋土は、第4層が自然堆積で、それ以外は人為的に埋め戻された堆積土と考えられる。遺物は、第2層から大量の土師器皿を主体とした土器類が出土している（収納コンテナ45箱分）。第1'・2'層にも比較的多いが、第2層の下部には堆積土より土器の方が多いような状態でレンズ状に堆積する部分が多かった。遺物は底部糸切りの土師器大皿（77～84）・小皿（85～97）を主体として、土師器脚台付皿（100～102）・外反口縁の大皿（98・99）・土釜（107・108）、瓦器碗・小皿、瓦質須恵器甕、須恵質捏鉢（110～112）、白磁碗（113）・皿、土錘、瓦、砥石などが出土している。上記の遺物に混じって、比較的多く古墳～奈良時代の遺物も出土している。



第18図 溝SD9・2次溝SD3・SD7土層図

溝SD109 (第30図、図版十三・十四) SD9との新旧関係を明らかにできなかったが、状況から判断して同時に埋め戻されたものと考えられる。溝の掘り込みは断面「U」字形を呈する。一部で底面が一段深く掘り込まれている。幅1.4~1.6m、深さ60cmで、W6付近で南側に折れ曲がり、後述する2次SD3に続いていく。埋土の堆積・遺物の出土状況はSD9に類似する。遺物は底部糸切りの土師器大皿(115~117)・小皿(118~121)を主体とする(収納コンテナ15箱分)。

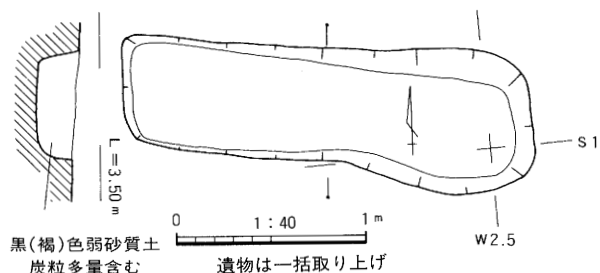
2次溝SD3 (第18・24・30図、図版十・十四) SD109に連続する溝で、最大幅2m、深さ1.1mを測る。南端は1985年度調査区と重複している。掘り込みは、上部60cmまでが緩やかに傾斜し、下部50cmは断面「U」字形を呈している。埋土の状況から、第3層の下部が一時期の溝の底を成していた可能性が考えられる。遺物は第1層から小破片が多いのに対し、第2層中位から下部にかけて土師器大皿(126~133)・小皿(134~138)を主体として、土釜(141)・甗(142・143)・竈(278)・鉢(140)などがある(収納コンテナ22箱分)。なお、SD109・2次SD3と1985年度調査溝とで「コ」の字形の配置(第17図)を示し、南北約48mを測ることになる。

溝SD110 (第31図) 2次溝SD7・8 (第18図) やや不整形な平面形であるが、南北方向に延びる幅1.6~2m、深さ30~60cmの溝である。SD109・2次SD3を取り囲むように位置しており、土層から内側の溝に先行するものである。この状況は1985年度調査区(第17図)でも続いている。遺物は土師器大皿(144)・小皿・埴(148)・甕(149)・土釜、瓦器碗(146)・小皿(147)、須恵質捏鉢(150)などがある。遺物は内側の溝とは対照的に小破片が多く(収納コンテ

ナ4箱分)内側のものより若干古い様相を示している。なお、本来はSD9もSD110・2次SD7・8に続くのであろうが、SD109・2次SD3の掘削に際してSD9そのものが再掘削された可能性が考えられる。

2次土坑SK25 (第19図) 長軸2.1m、短軸0.6m、深さ25cmで、長方形を呈する。

埋土には多量の炭粒が混じっている。遺物は土師器大皿・小皿・甕・土釜、瓦器碗・小皿、須恵質捏鉢などがあり、2次SD3より古い様相が存在する。



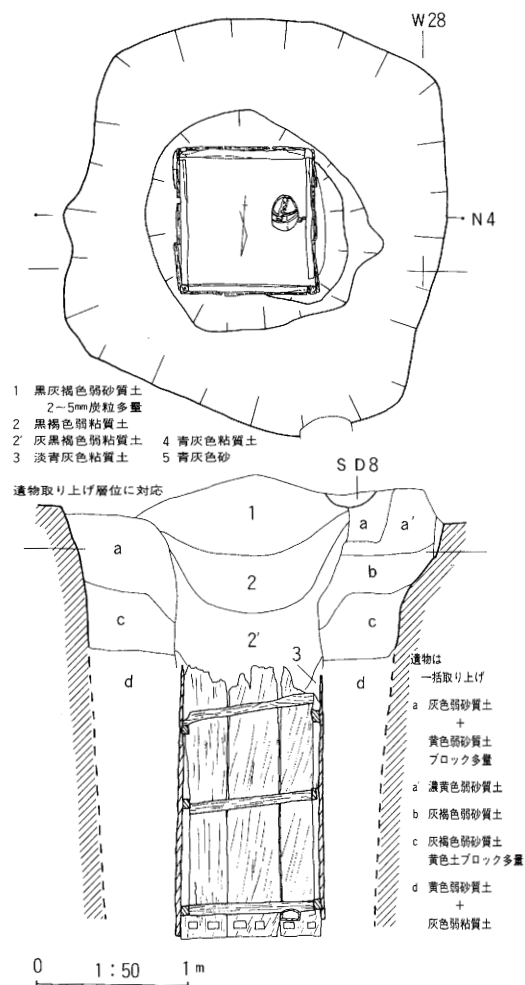
第19図 2次土坑SK25実測図

南西隅遺構? (第31図) 調査区の南西隅で東西1.5m、南北0.85m、厚さ25cmにわたり炭粒の非常に多い黒褐色粘質土が認められた。堆積土より土器の方が多く、遺物は破碎した状態の底部糸切りの土師器大皿(152~155)・小皿(156~160)を主体として、土釜、瓦器碗などが出土している(収納コンテナ6箱分)。

掘立柱建物1 桁行4間(8.10m)・梁行1間(2.10m)以上の東西棟の建物である。桁行主軸方向はN-82°30'-Wである。柱間は西端の1間分(1.90m)を省けば比較的揃っており、2.00~2.20mを測る。建物は遺構の重複からSD9より新しく、SK6より古いと考えられる。

掘立柱建物2 桁行3間(6.45m)・梁行2間(4.45m)の東西棟の建物である。桁行主軸方向はN-80°30'-Wである。柱間は比較的揃っており、2.15~2.30mを測る。柱穴の一部はSK143と重複する部分で検出できなかったことから、これらの遺構より古い12世紀代の可能性もある。

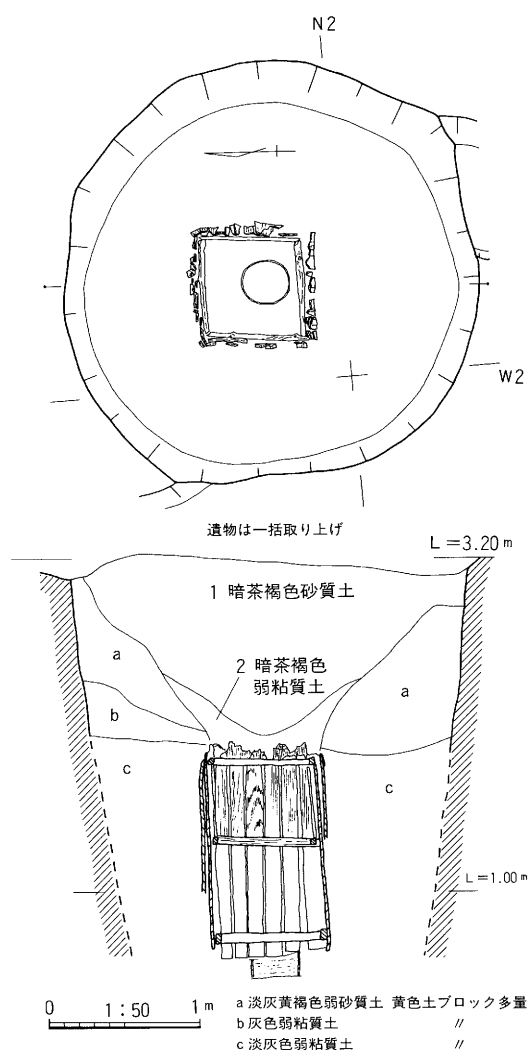
建物3・4共にSD109より新しい。その他、平安時代末~室町時代初頭と考えられる多数の柱穴を検出した。柱穴から出土した遺物から、主体は14世紀代にあるものと考えられる。



第20図 井戸SE7実測図

井戸SE7（第20・31図、図版六・十四・十五） 掘形は検出面で、一辺約2.5mの歪つな隅丸方形を呈する。井側は内辺90～92cmの方形の縦板組みの構造である。各辺に幅約30cm、厚さ4cm弱の縦板3枚を立てかけ、四天柱と3段の横棧で固定されている。縦板は状態の良好なもので約1.8m分が遺存していた。縦板の下端には、湧水の流れをよくするため板材一枚に対し2孔ずつの穴を穿っている。調査時に井側内第5層の深さから著しい湧水があり、縦板の下端で標高0.45mを測る。埋土は大きく5層に区別でき、途中から人為的に埋め戻されたものと考えられる。第5層面において曲物製釣瓶（301）が出土している。遺物は掘形内では底部糸切りの土師器大皿・小皿を主体とした小片が非常に多く、井側内でも第1・2層は小片が多い。次いで下層に下がるに連れ遺物量を減じるが、第3層で土師器大皿（161）・第4層で土師器小皿（163～165）、瓦器碗（168）の完形品が出土している。その他、底部糸切りの土師器大皿・小皿を主体とし、土釜、瓦器小碗（169・170）・小皿、瓦質鉢（171）、須恵質捏鉢・甕、丹波焼甕（172）、白磁碗・皿、土鍾（173）、瓦（174～176）などが出土している（第1層で収納コンテナ5箱分、第2層で6.5箱分、第3層で2箱分、第4層で2.5箱分）。また、第3層下部から第4層を中心として、木葉、桃の種、水苔、昆虫の羽根、藁、竹、炭化米、曲物蓋、板材などが出土している。遺物から、井戸は12世紀中頃から後半にかけて機能し、12世紀末～13世紀前半に埋め戻され、13世紀中頃には完全に埋没したものと考えられる。

井戸SE116（第31図、図版七） 掘形は検出面で約2.8m、下部で径1.9mの歪つな円形を呈する。井側は径約60cmの円形を呈する石組である。SE116は調査途中、雨水による土砂の大崩落のため完掘できなかった。土層の観察において、石組の中心付近から上に約90cmの長さにわたり竹筒の痕跡を認めることができた。石組は20～60cm大の結晶片岩や川原石を利用して積まれており、60cmの深さまで認めることができた。埋土は全て人為的に埋め戻されたものと考えられ、大きく三層に区別できる。井側内下部から曲物蓋、柄付き鉄鎌などが出土している。遺物は底部糸切りの土師

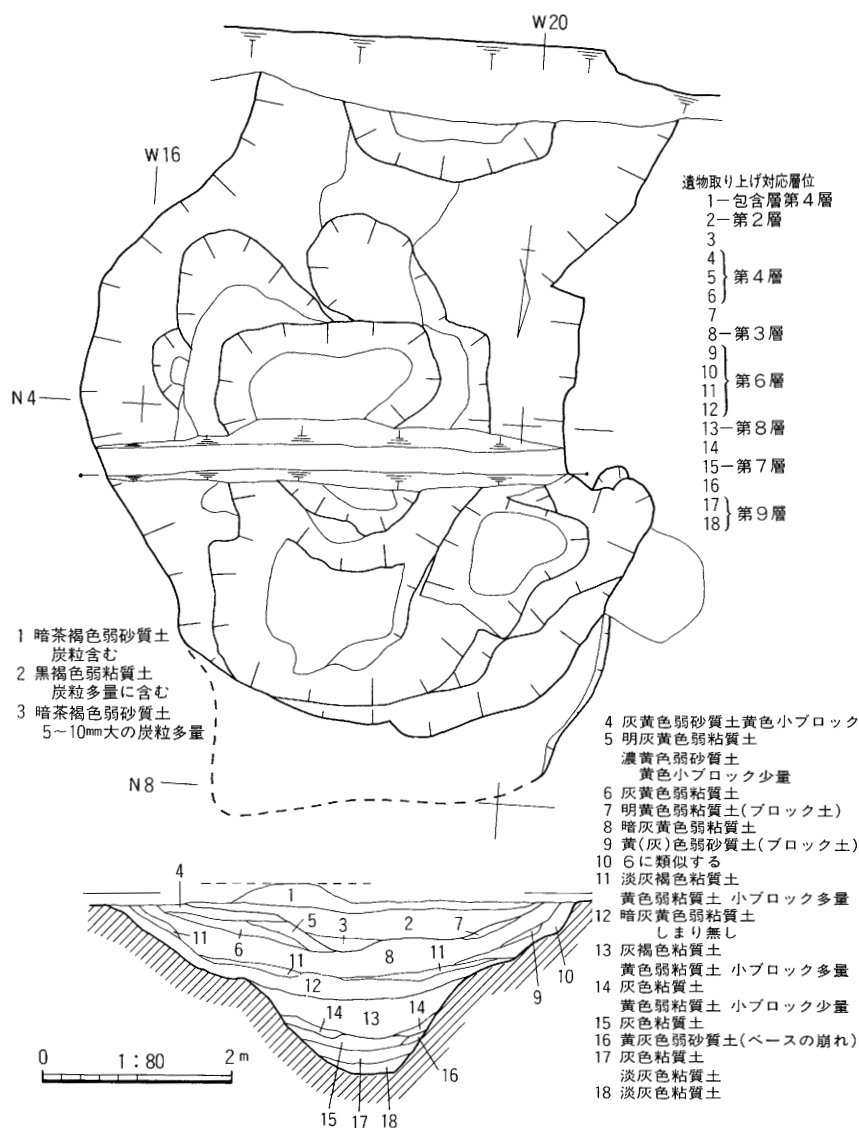


第21図 井戸SE128実測図

器皿を若干含むが、底部未調整の土師器大皿・小皿・土釜、瓦器碗（177）、瓦質摺鉢、須恵質捏鉢、備前焼甕（179）、瓦などがある。埋土の最上層からは袋物の染付が一片出土している。遺物から、井戸は13世紀中頃から後半にかけて機能し、13世紀末～14世紀前半に埋め戻され、15世紀初頭には完全に埋没したものと考えられる。

井戸SE128（第21・32図、図版七・十五） SD110・SK171を削り取り掘削されている。掘形は検出面で、径約2.7mの円形を呈する。断面形は、若干傾斜するものの直線的に立ち上がる。井側は内辺66cmの方形の縦板組みの構造である。板材は、東・南面の一番内側で、幅10cm前後、厚さ2cmの縦板6枚を、北面で縦板4枚、西面で縦板3枚を立てかけ、四天柱と3段の横棧で固定されている。縦板は各辺において、二重ないし三重になっておりSE7と比較して構造上異なる。縦板は状態の良好なもので約1.45m分が遺存していた。板材の下端から下部には、径32cm、深さ16cmの曲物製

井筒が据え置かれていた。曲物は底部を欠いており、二重になっていた可能性もある。埋土は大きくレンズ状に堆積し、縦板が朽ちていくなかで自然に埋没したような様相を呈している。遺物は底部未調整の土師器大皿(180・181)・小皿(182～187)・脚台付皿・土釜(190・191)・土塼(192・193)・捏鉢(195)、瓦器碗、瓦質捏鉢・甕、須恵質捏鉢(196～198)、常滑焼甕、備前焼、青磁の碗(200)、白磁鉢(199)、瓦(201・202)が出土している。遺物から、井戸は14世紀前



第22図 土坑SK 6実測図

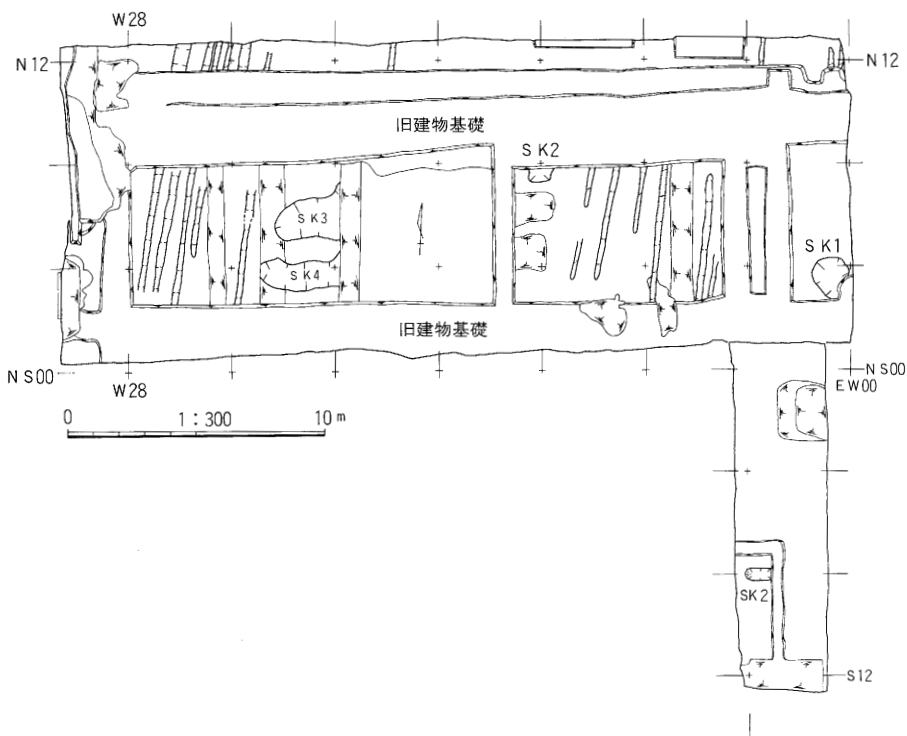
半～中頃にかけて機能し、14世紀後半に埋没したものと考えられる。

SK 6（第22・33・34図、図版八・十五） SK 6の本来の検出面は、基本層序第4 a層除去面と考えられる。基本層序第4層掘削時に、異常に炭粒の多い範囲が認められた部分が本来のSK 6の平面規模と考えられる。南北は北側の溝SD 9に重複する部分までの8.5m、東西はW14ライン～24ラインまでの約10mの範囲にかけて、深さ約2 mの不整形な大形の土坑である。基底部は凹凸が著しく、土層観察用ベルトを残した部分が最も深く、各方向にステップ状の段を有したものと考えられる。埋土は全て人為的に埋め戻された堆積土と考えられ、第1～3層、第4～12層、第13～14層、第15～18層の大きく4分することができる。下層になるにしたがって、古い時期の遺物を多く含む傾向にある。遺物は土師器大皿（208～218）・小皿（219～229）・土釜（247・248）・土埴（249～251）・土鍾、瓦器椀（230～240）・小椀（241・242）・小皿（243・244）・鉢・手捏ね土器、瓦質三足釜（259）・甕（257・258）・火鉢（256）、青磁碗（261～266）・皿・壺（269）、白磁碗（270・271）・皿（272・273）・壺（274）・水注・合子（267・268）、常滑焼甕（260）、須恵質捏鉢（253・254）、鉄釘・錐状鉄製品、板材、銅貨、石鍋（275）・砥石（277）のほか土鍾、瓦が出土している。

（3）第一遺構面（上面）（第23図）

2次土坑SK 2（第32図） 基本層序第4 a層に掘り込まれた土坑である。長軸1.0m、短軸0.5m、深さ30cmで、土坑内に径5～10cm前後の礫が充填されていた。遺物は土師器甕（205）・土埴（203）・蛸壺（204）・瓦などがある。状況から土壌墓の可能性が考えられるが、定かでない。

その他、江戸時代～明治の耕作土と考えられる基本層序第3層除去面において、畑の畝溝を検出している。畝溝はN-7°-Eに振れる方向にある。向陽高校の南側に現在ある水田と同様の方向を示している。



第23図 第一遺構面（上面）調査遺構全体図

IV ま と め

今回の調査で得られた成果と既往の調査を簡単にまとめておくことにする。方墳の発見など遺構の内容としては、既往の調査成果を補強することとなった。

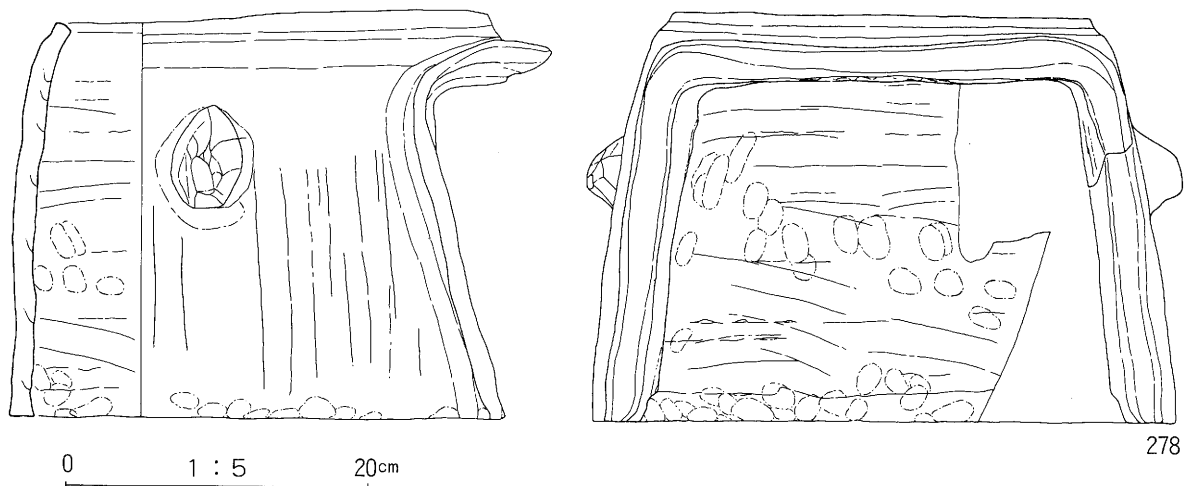
県立向陽高校を中心とした範囲

市立日進中学校・日前幼稚園を中心とした範囲

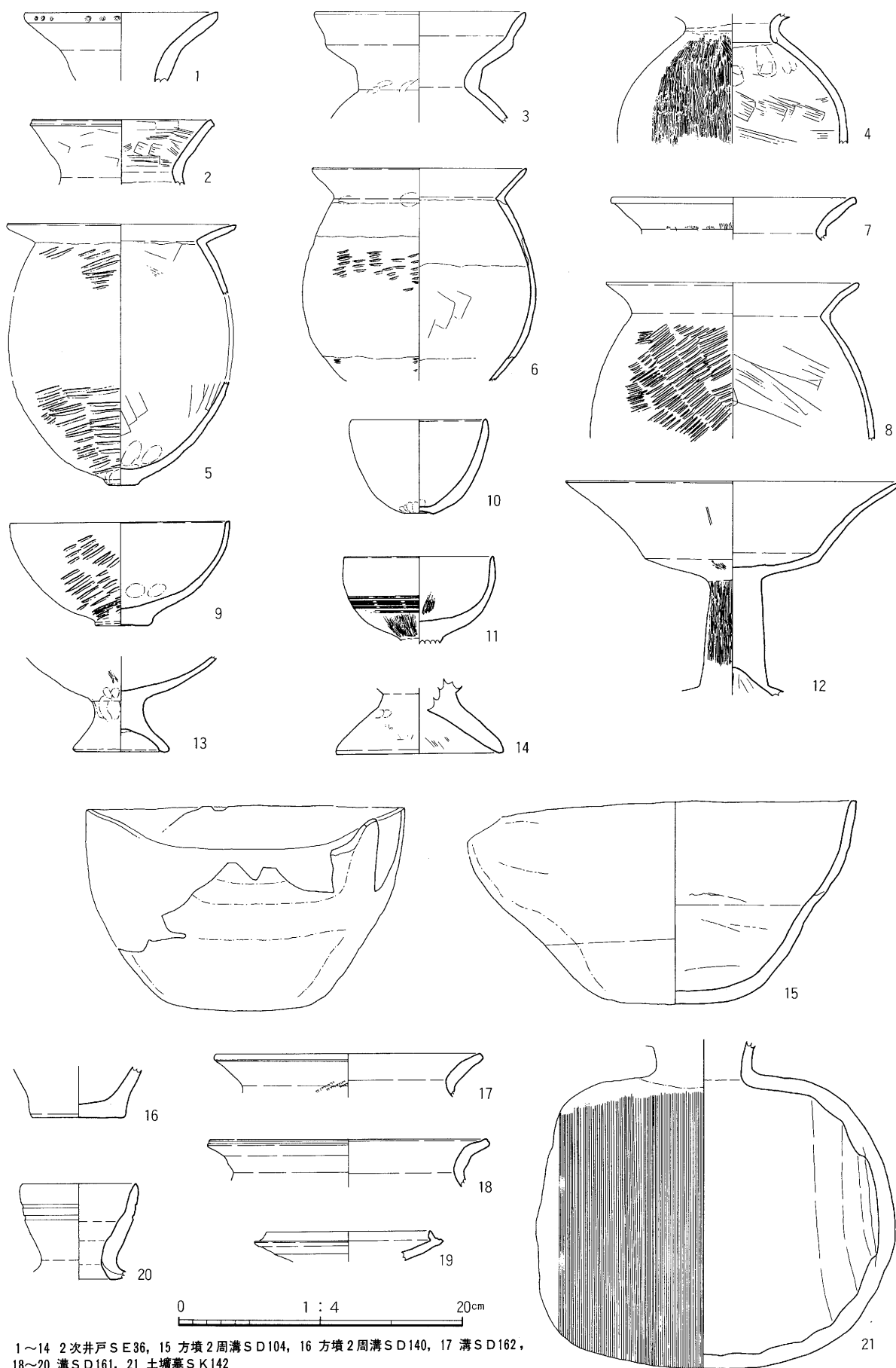
弥生時代前期	土器の出土	遺物包含層
弥生時代末	集落 井戸3基・土坑・溝	
古墳時代前期～後期	墓域 前方後円墳1基・方墳7基・甕棺墓1基	集落 堅穴住居2棟
古墳時代末～奈良時代	集落 掘立柱建物・井戸1基・土坑・溝	集落 土坑
平安時代前期・中期	集落 掘立柱建物・井戸1基・土坑・溝	
後期	集落 溝で区画された屋敷地・ 掘立柱建物・井戸1基・土坑	
鎌倉時代	集落 掘立柱建物・井戸2基・土坑	
室町時代	集落 掘立柱建物・井戸1基・土坑	

以上のことから、秋月遺跡では西東に分かれて古墳時代の墓域と集落が存在することになる。当然、両者が直接関係するものかどうかは今後の課題である。既往の調査成果からすれば、県Ⅲと市Ⅲの調査地において沼地状の地形が確認されている。また、市Ⅰの調査地でも沼地状の地形が確認されており、地理の分野の観察においても適合するところである。この地形の拡がりや状況についても今後の課題となるが、少なくとも鎌倉時代以後に埋没したと考えられる。

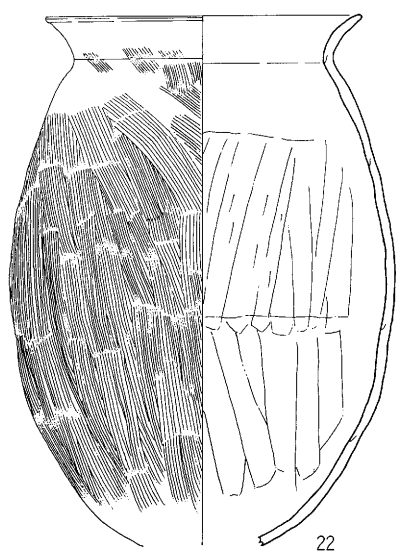
平安時代後期の遺物量からは、当該調査地周辺に膨大な量の食器類を消費した特異な集落の在り方が浮き彫りにされるものである。また、それ以後室町時代にかけても、秋月遺跡を中心とした広い範囲に集落や墓域の存在を想起させるものである。



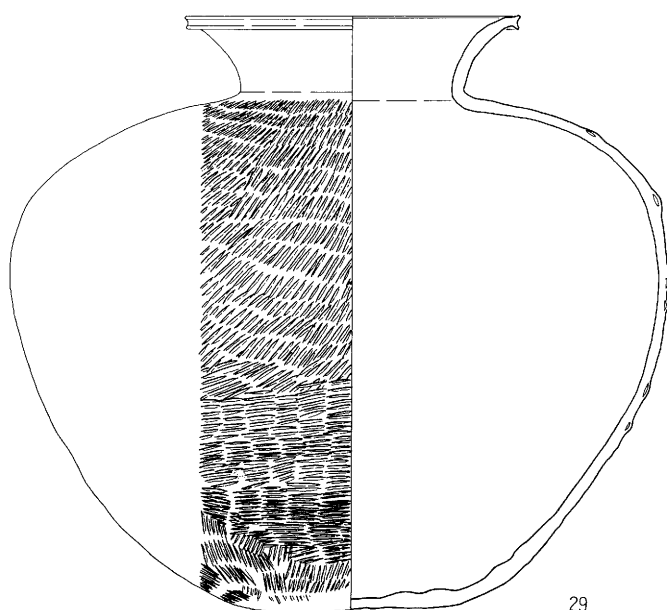
第24図 2次溝SD3出土遺物実測図



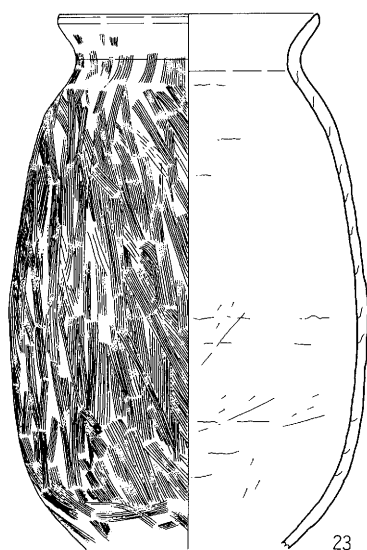
第25図 出土遺物実測図 1



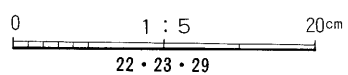
22



29



23



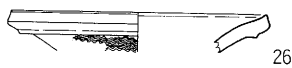
22・23・29



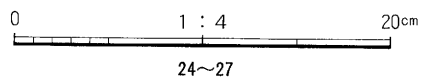
24



25

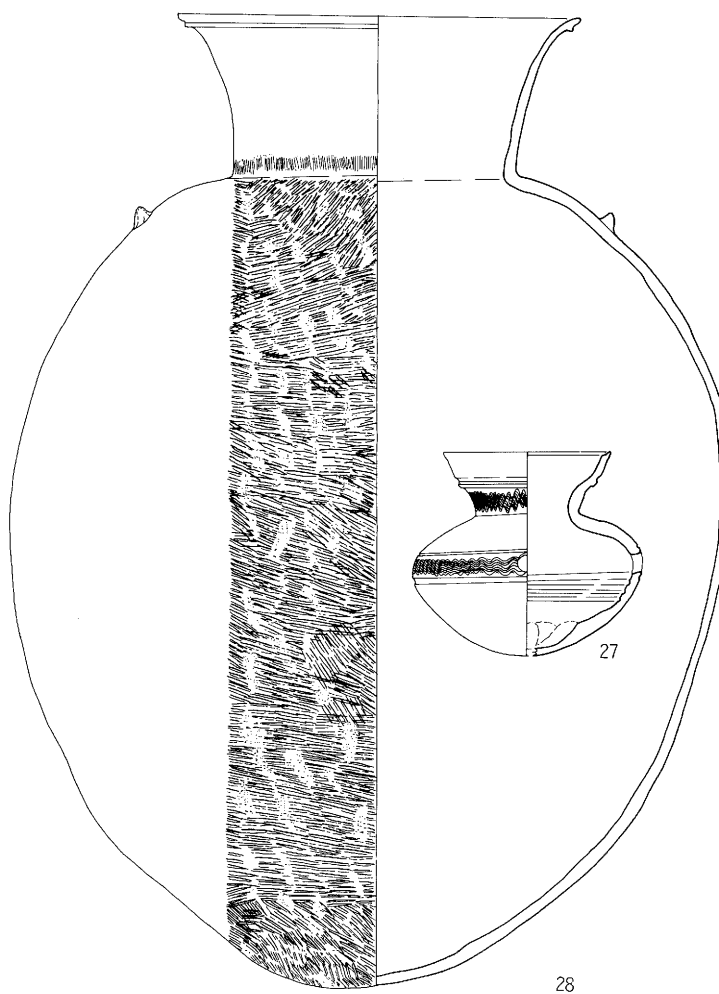


26

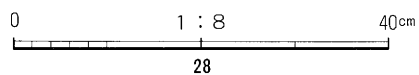


24~27

22・23 葬棺墓 S X 5, 24~27 方墳 1 周溝 S D 106,
28 方墳 1 周溝 S D 106 内土坑, 29 2 次土坑 S K 42

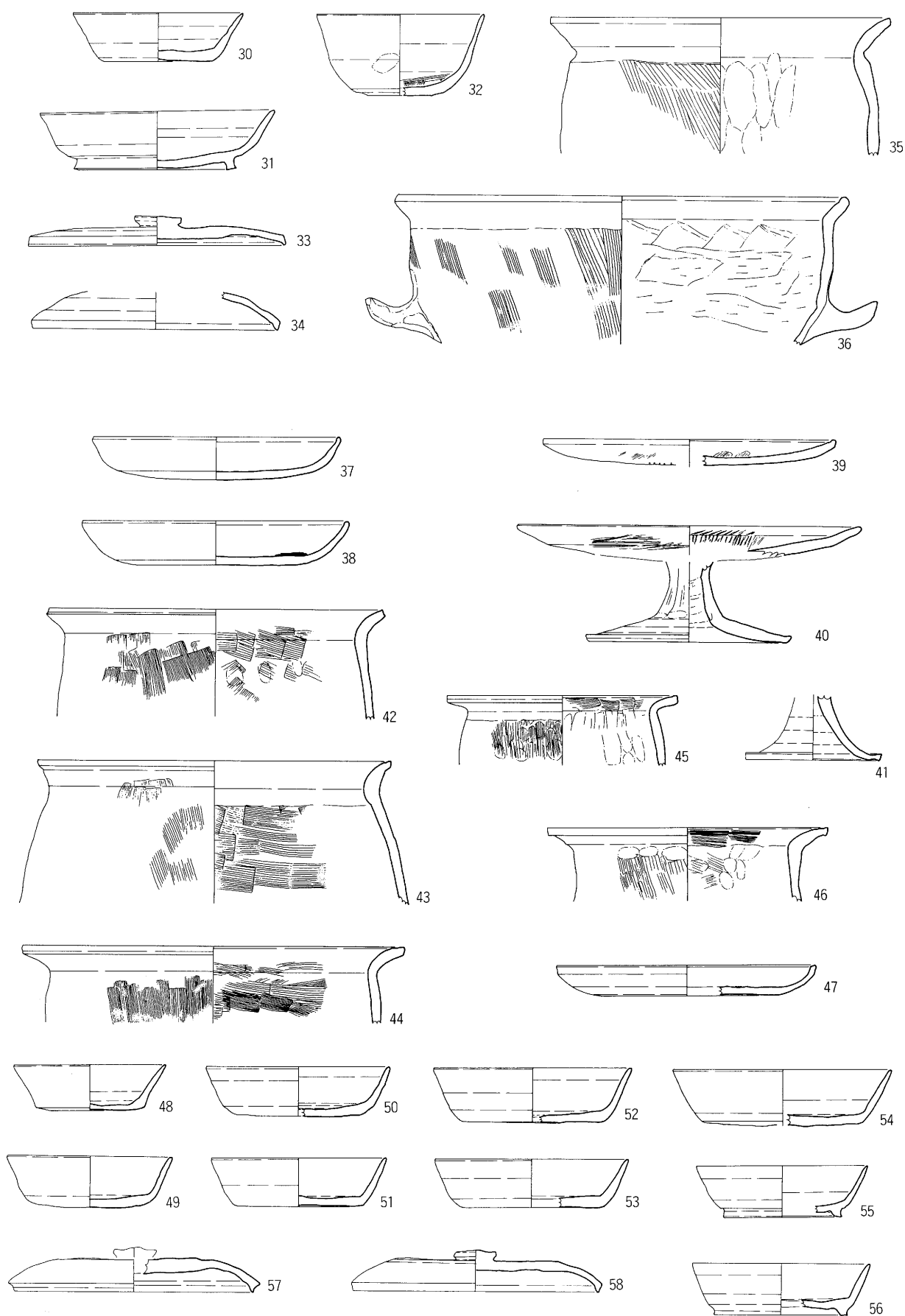


28



28

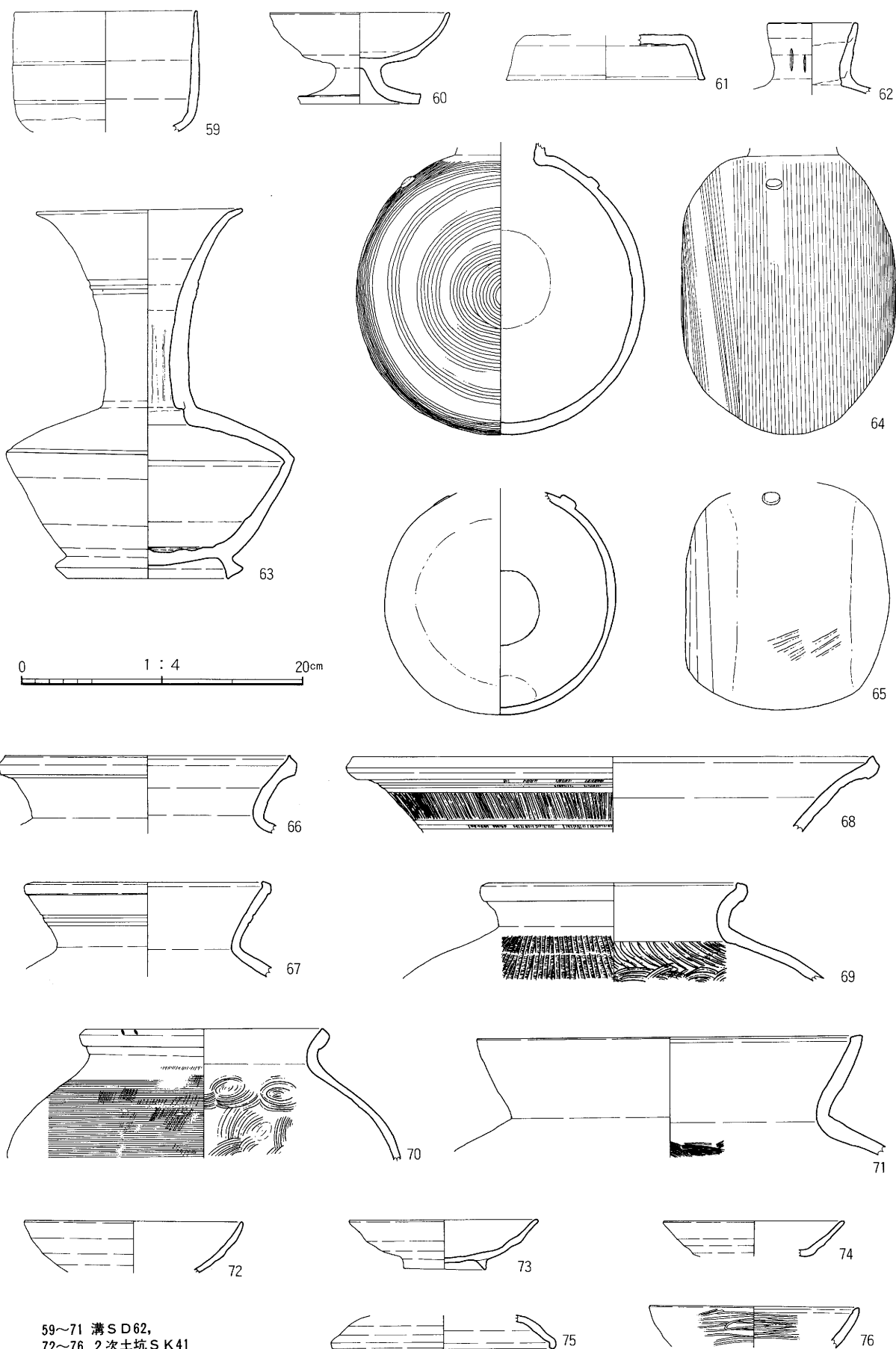
第26図 出土遺物実測図 2



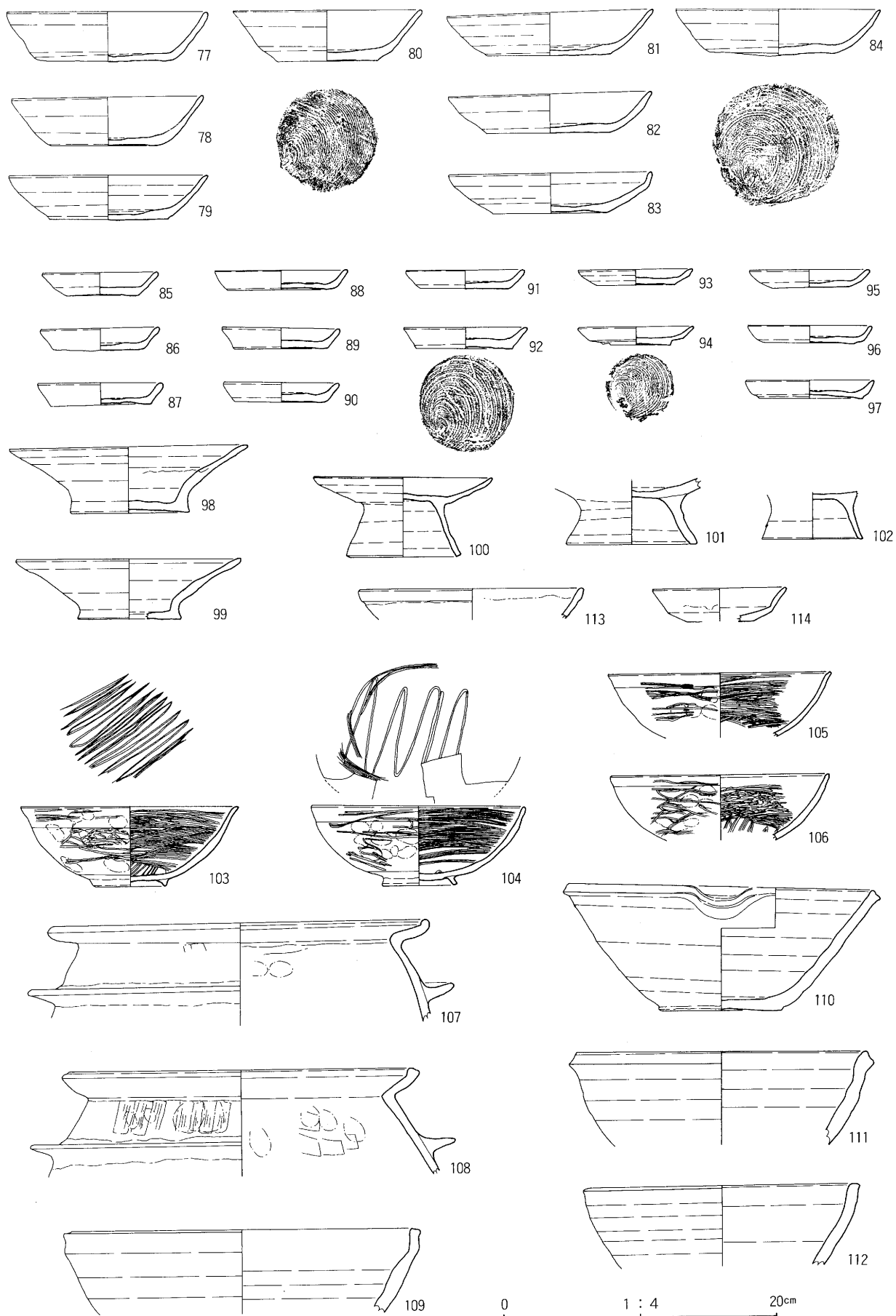
30~36 土坑SK171, 2次土坑SK5,
37~58 溝SD62

0 1 : 4 20cm

第27図 出土遺物実測図 3

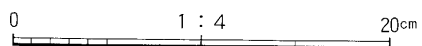
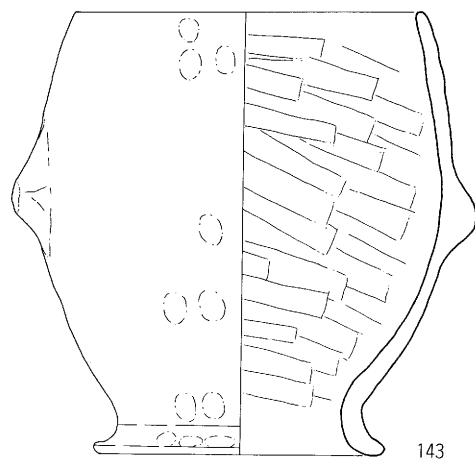
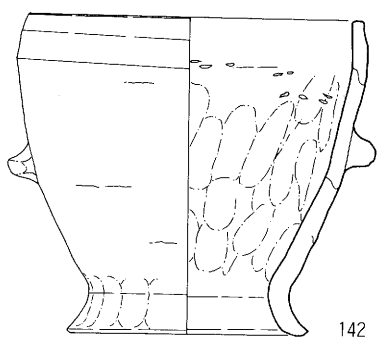
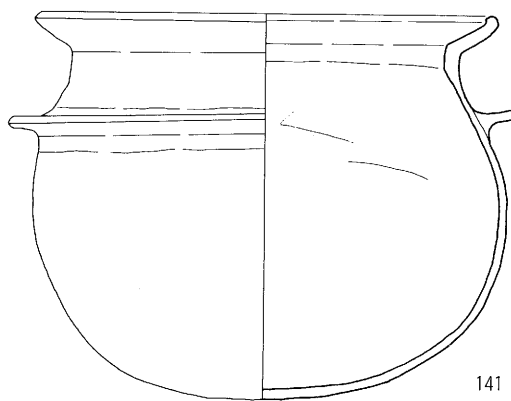
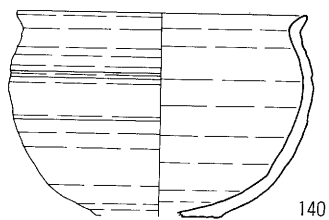
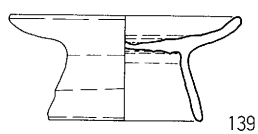
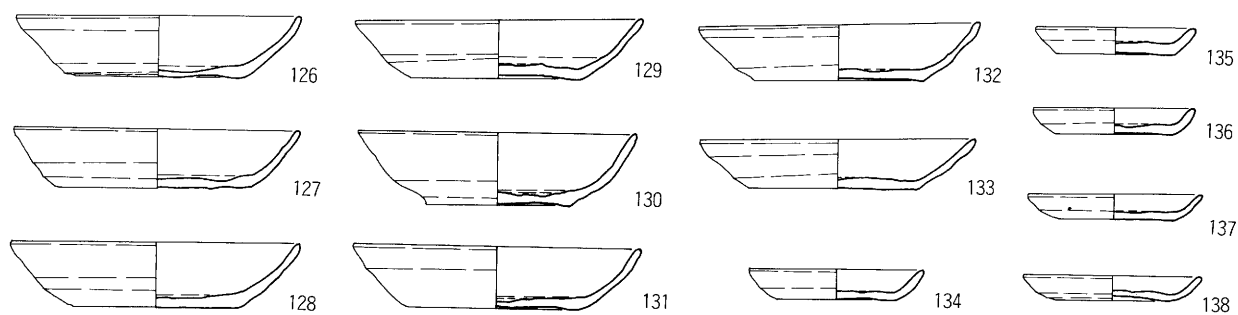
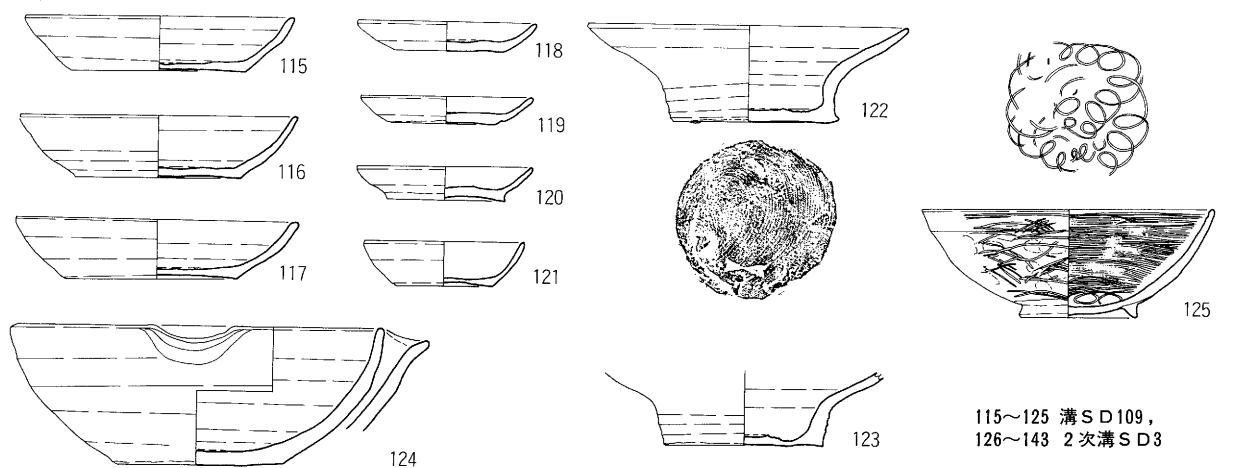


第28図 出土遺物実測図 4

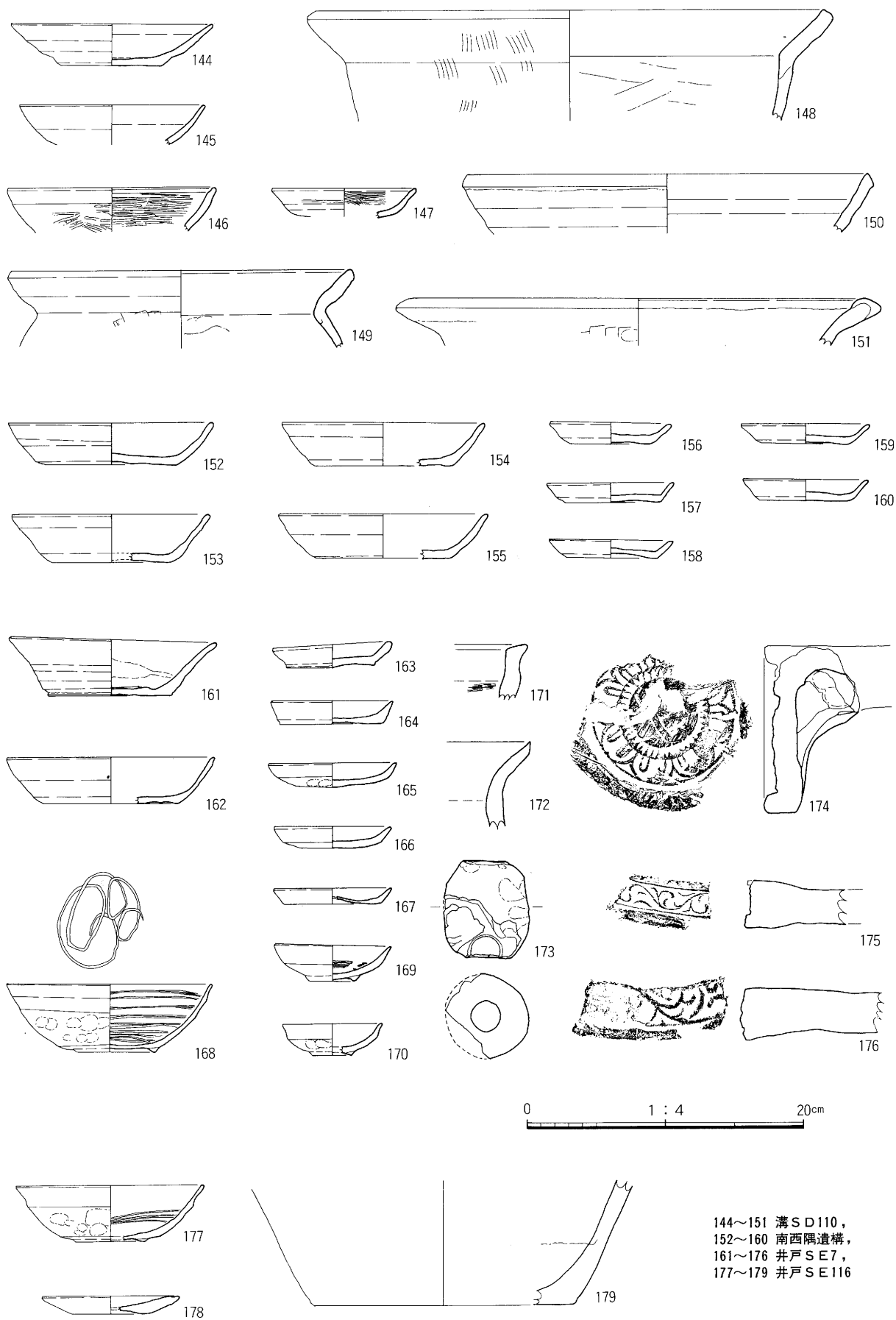


77~114 溝SD9

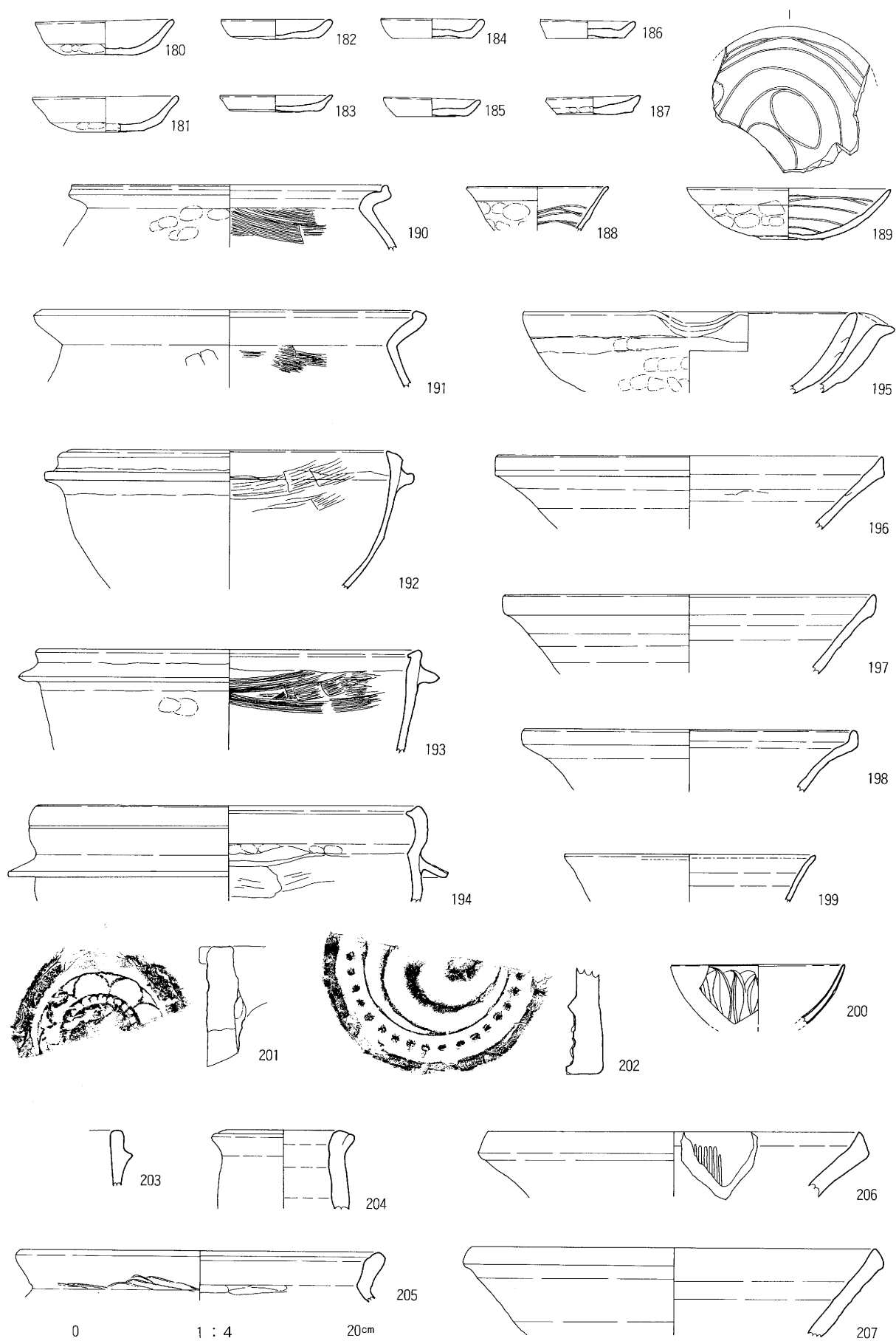
第29図 出土遺物実測図 5



第30図 出土遺物実測図 6

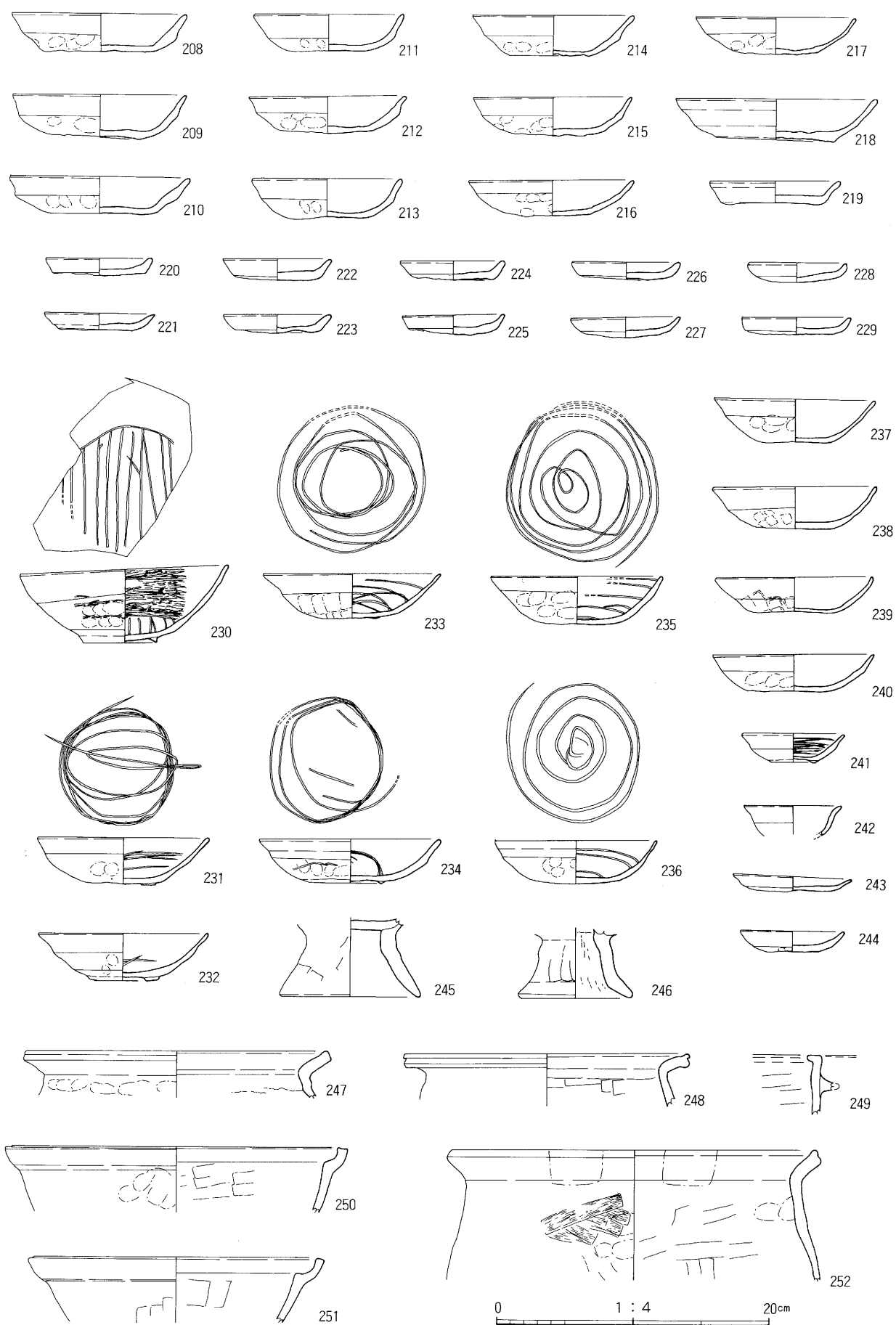


第31図 出土遺物実測図 7



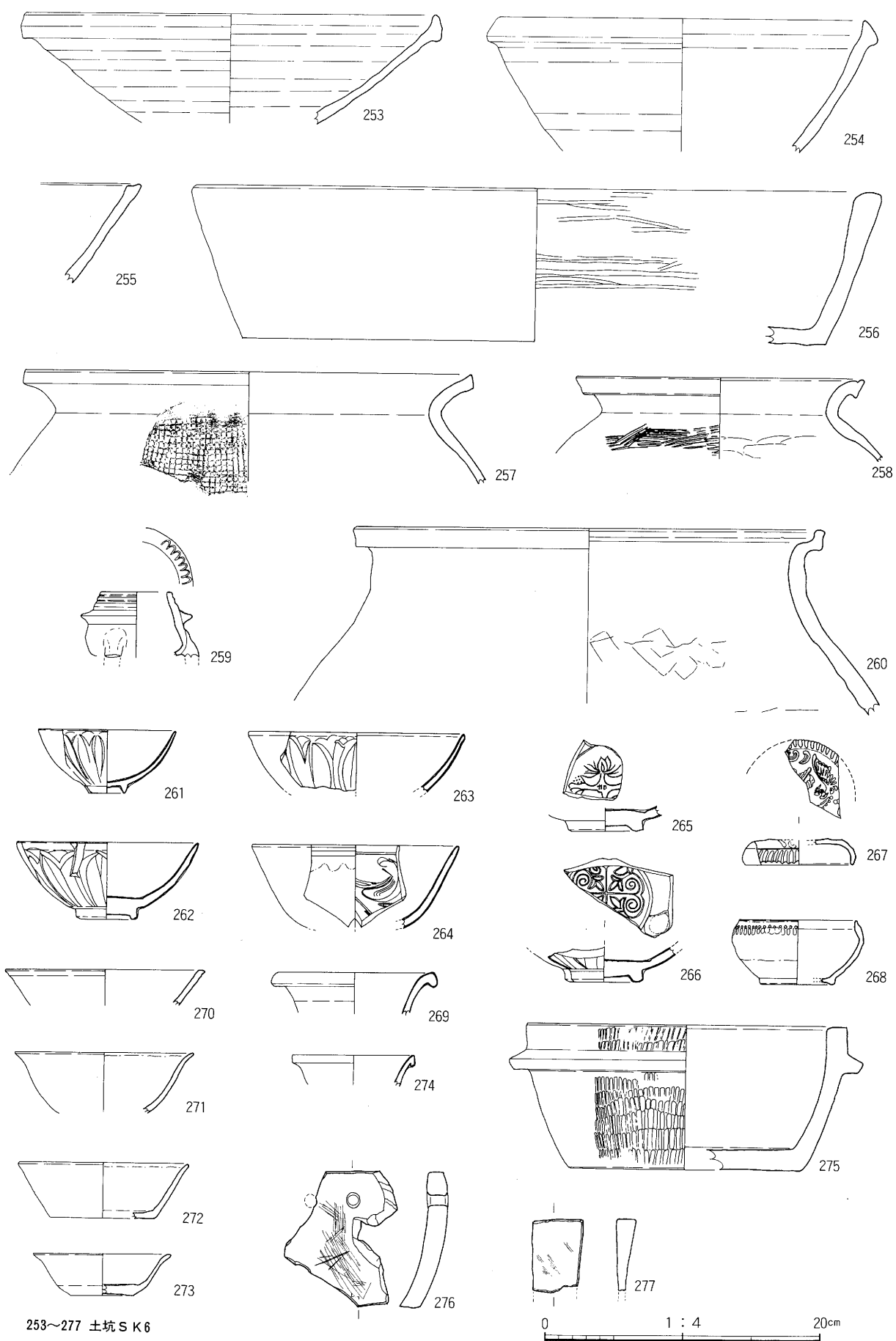
180~202 井戸SE128, 203~206 2次土坑SK2, 207 溝SD62第1層

第32図 出土遺物実測図 8



208~252 土坑 S K 6

第33図 出土遺物実測図 9



253~277 土坑 S K 6

第34図 出土遺物実測図 10



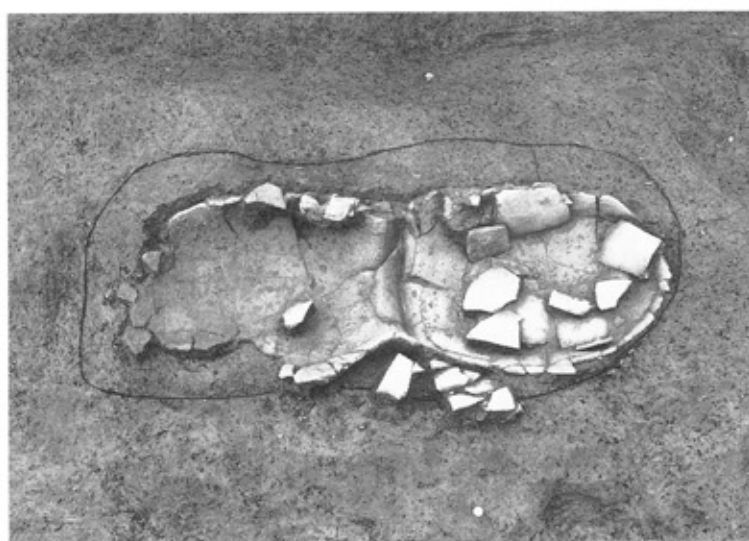
1 遺跡遠景（北西上空から）



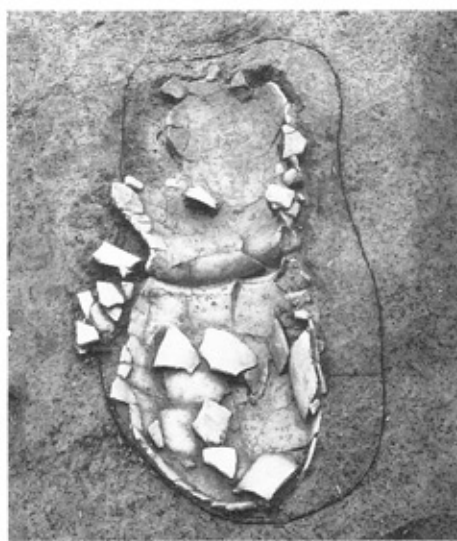
2 調査前の状況（南東から）



1 第三遺構面全景（東から）



2 甕棺墓 S X 5（北から）



3 甕棺墓 S X 5（西から）



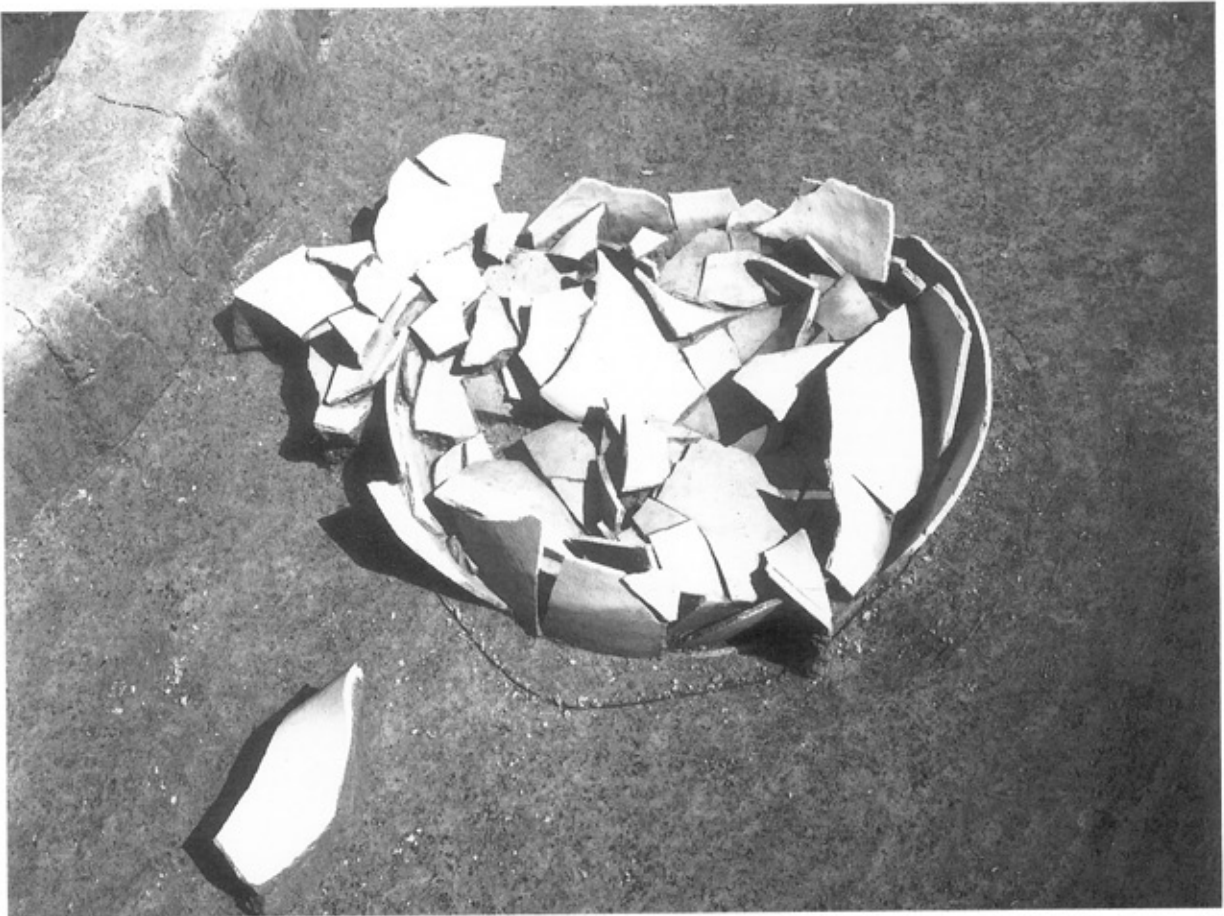
4 土坑 S K100（南東から）



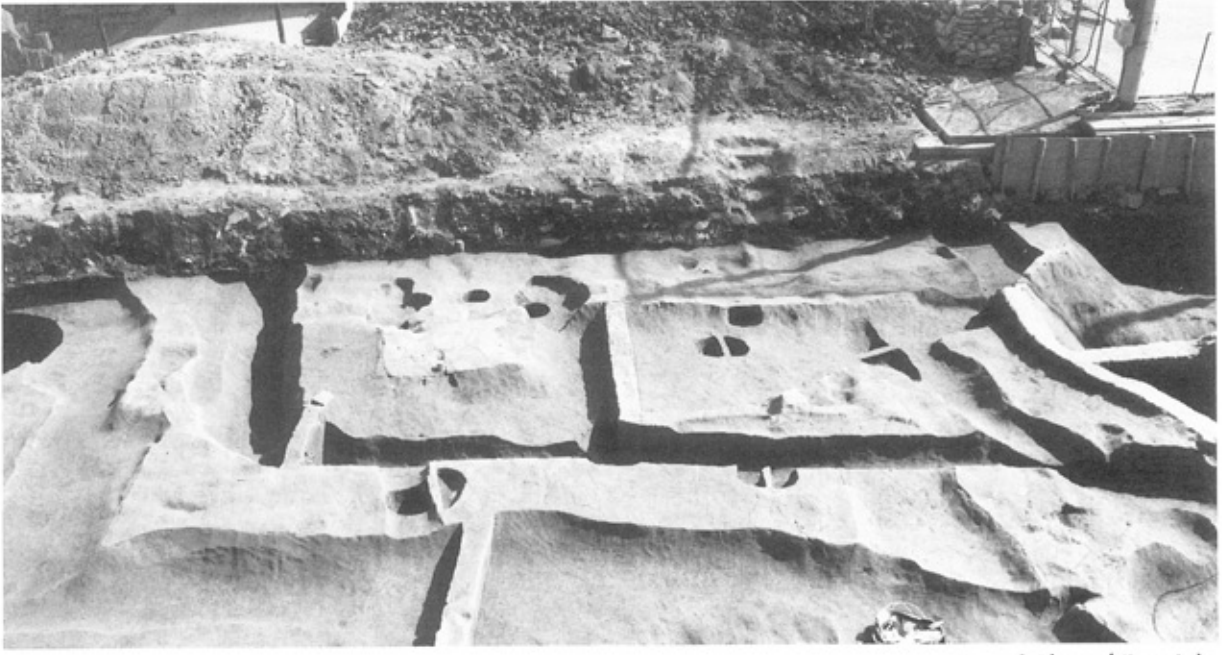
5 土坑 S K100土層（南西から）



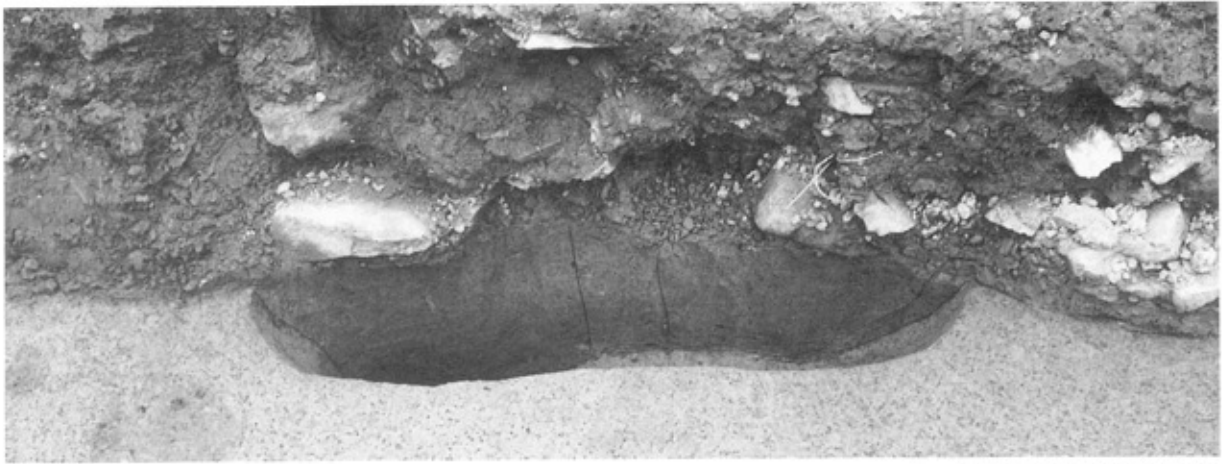
1 方墳1 (南東から)



2 方墳1周溝SD106内土坑 (西から)



1 方墳 2 (北から)



2 土坑 S K 115 (北から)



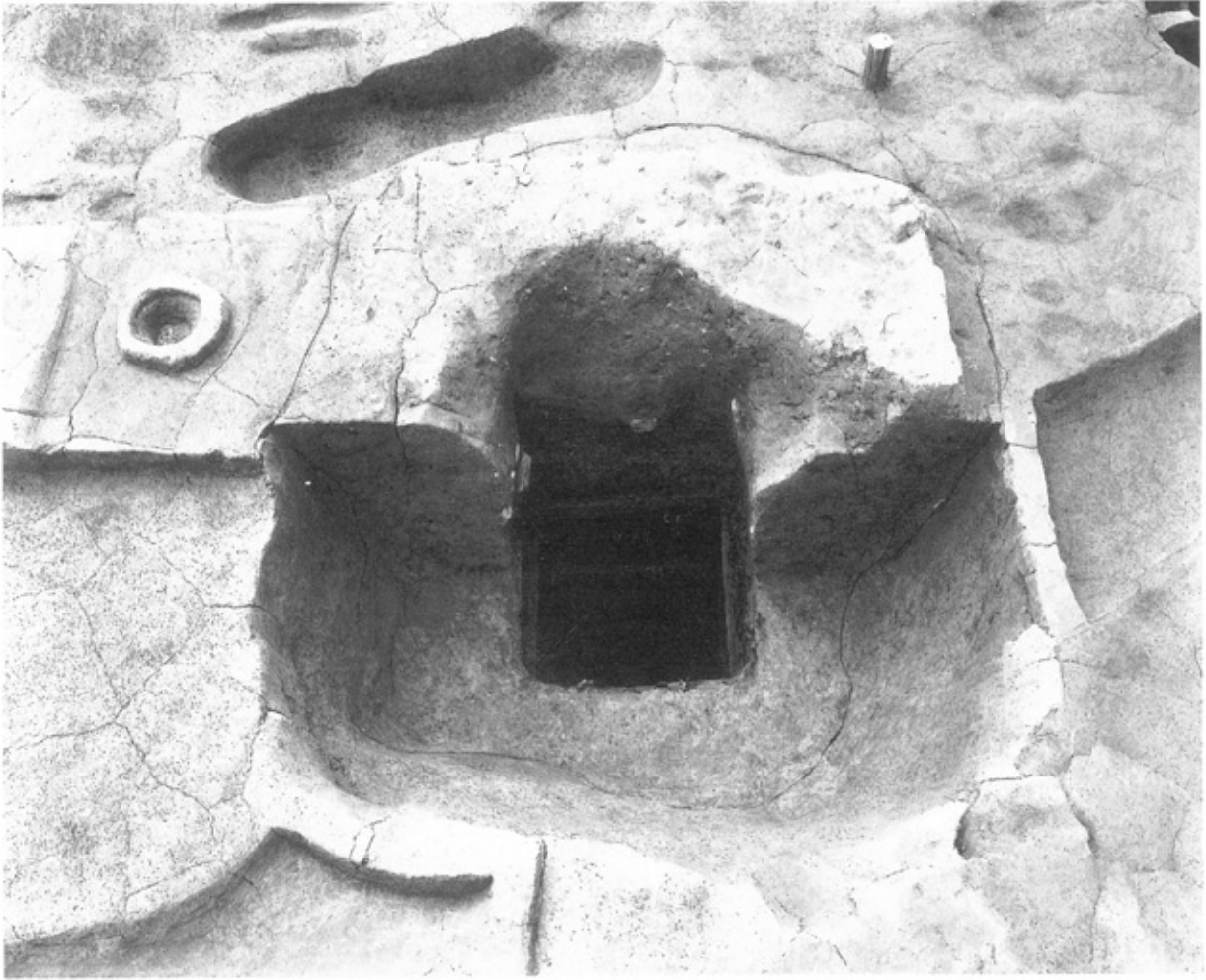
3 土墳墓 S K 142 (北東から)



1 溝S D 62西端遺物出土状況（南から）



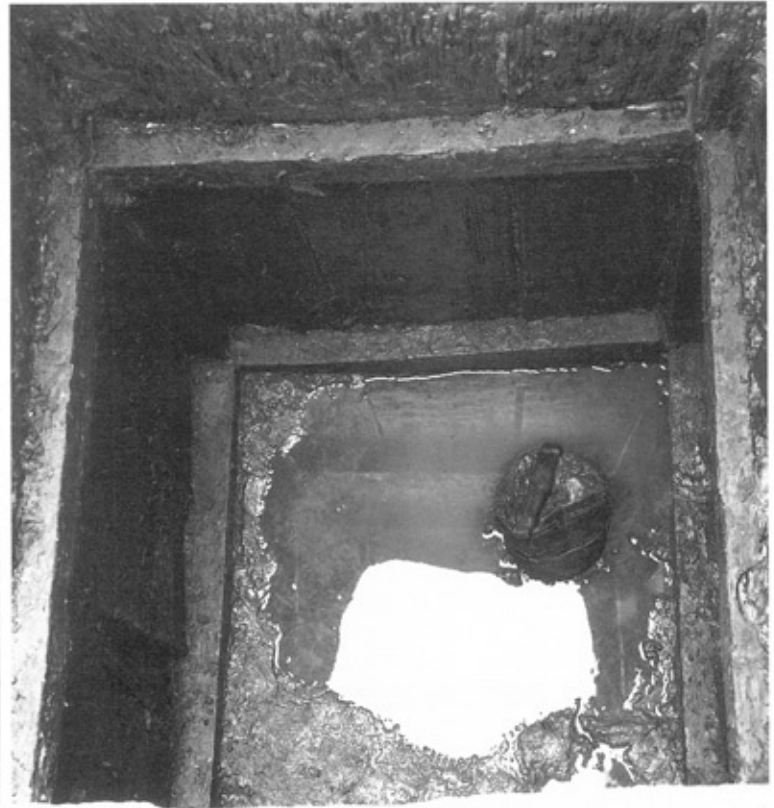
2 第二遺構面東側半分の遺構検出状況（北から）



1 井戸SE7（北から）



2 井戸SE7井側内細部（北から）
3 井戸SE7井側内細部（南から）



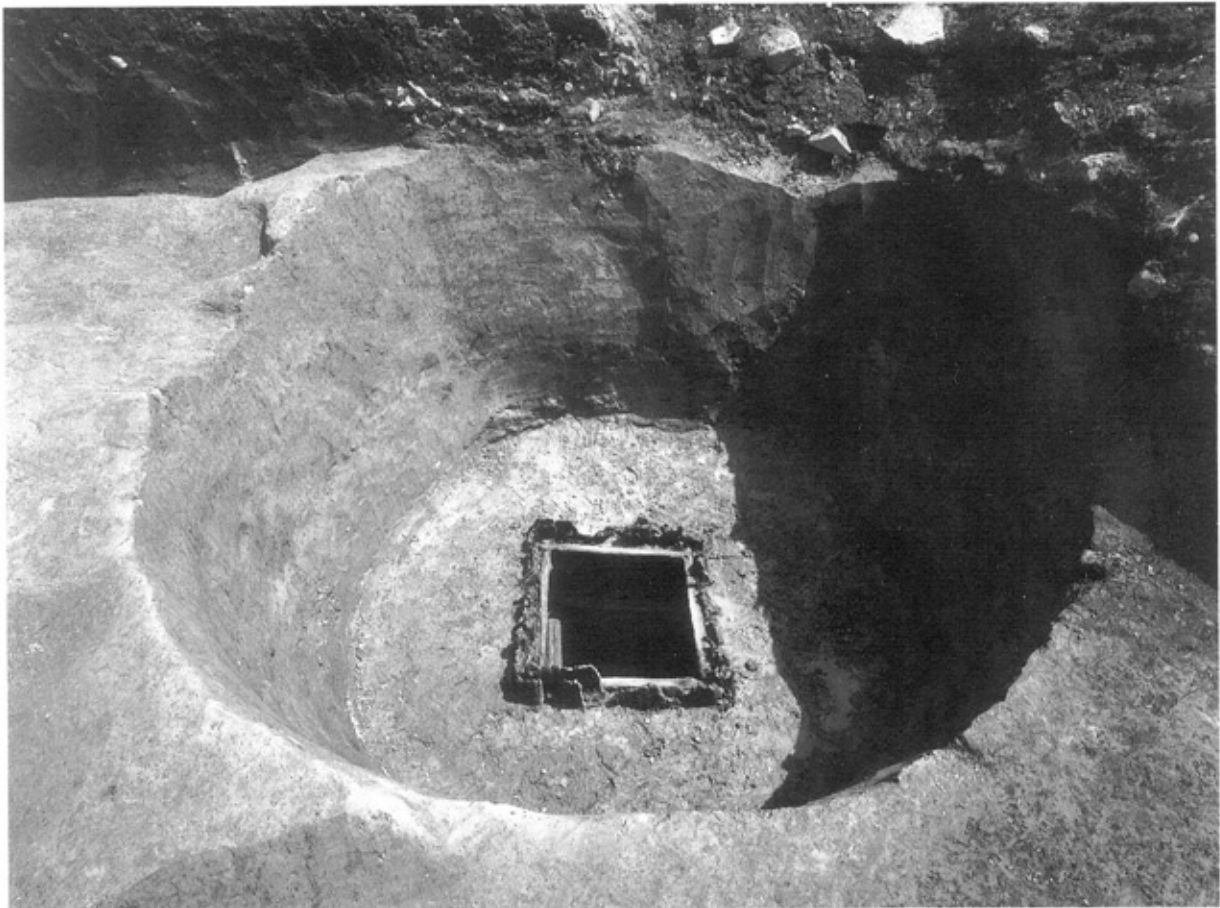
4 井戸SE7曲物製釣瓶出土状況（北から）



1 井戸SE116石組み（南西から）



2 井戸SE116竹出土状況（南東から）



3 井戸SE128（西から）



1 土坑SK6 (西から)



2 土坑SK6土層 (北から)



3 土坑SK6遺物出土状況 (東から)



4 土坑SK6石鍋出土状況 (東から)



1 2次第三遺構面全景（北から）



2 2次井戸SE36（西から）



1 2次第二遺構面全景（北から）



2 2次溝SD3遺物出土状況（西から）



3 2次溝SD3土層（南から）



4 2次溝SD7土層（南から）



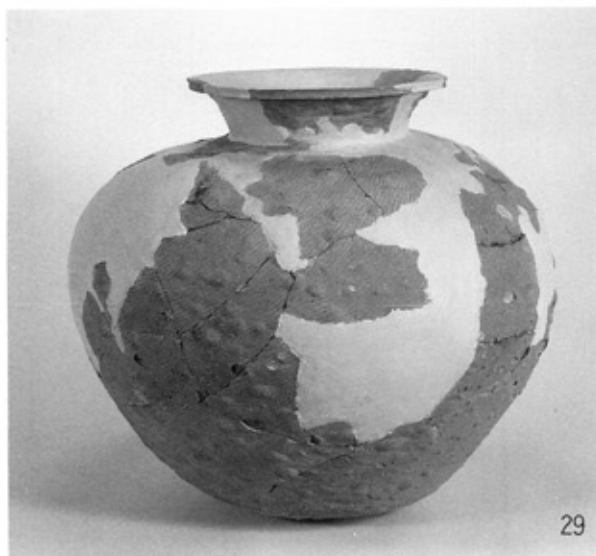
8



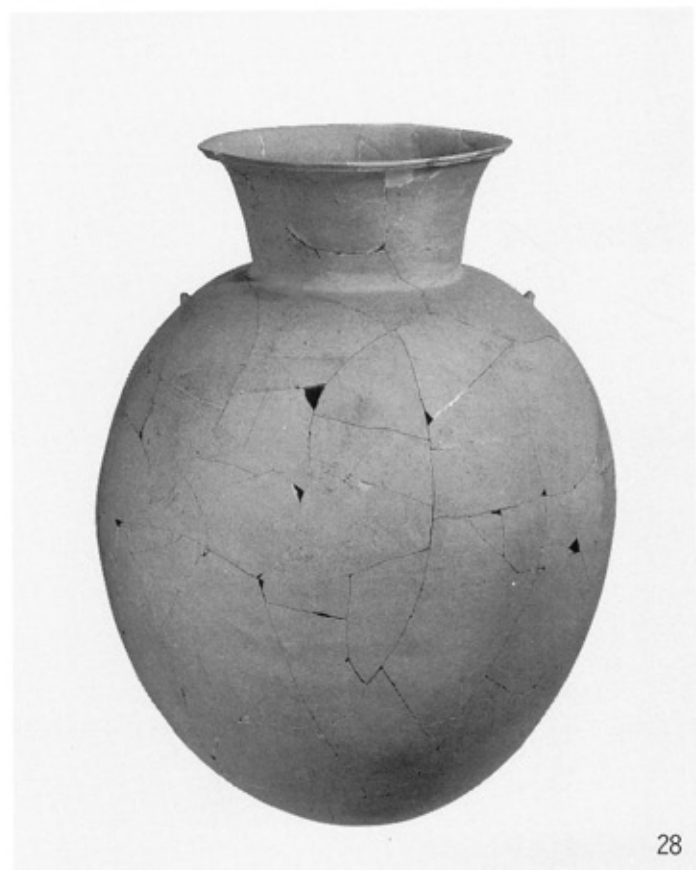
15



12



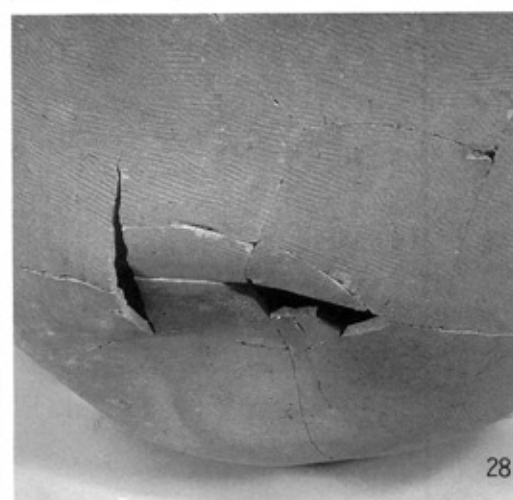
29



28



28



28

8・12 2次井戸 S E 36, 15 方墳2周溝 S D 104,
28 方墳1周溝 S D 106内土坑, 29 2次土坑 S K 42



22



23



21



27



31



58



63

21 土墳墓 S K142, 22・23 壙棺墓 S X5, 27 方墳1周溝 S D106,
31 土坑 S K171, 58・63 溝 S D62



60



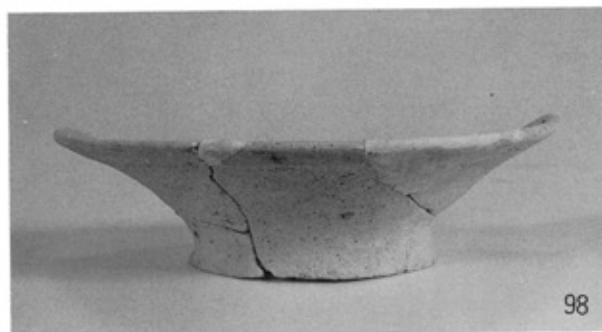
65



65



80



98



84



104



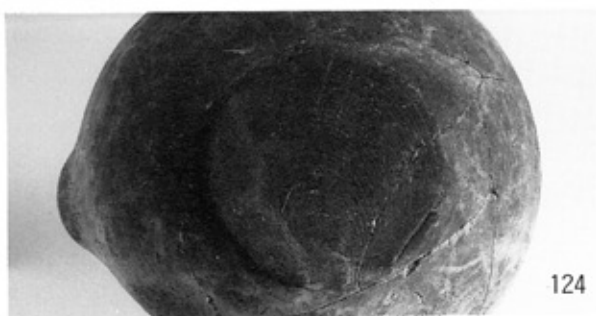
100



124



110



124

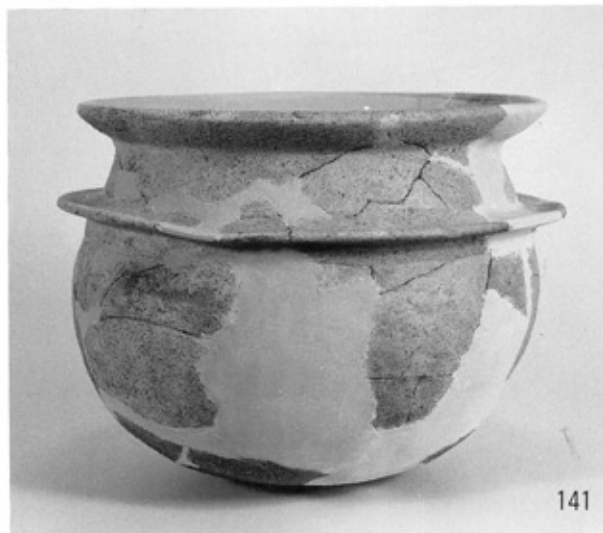
60・65 溝S D62, 80・84・98・100・104・110 溝S D9,
124 溝S D109



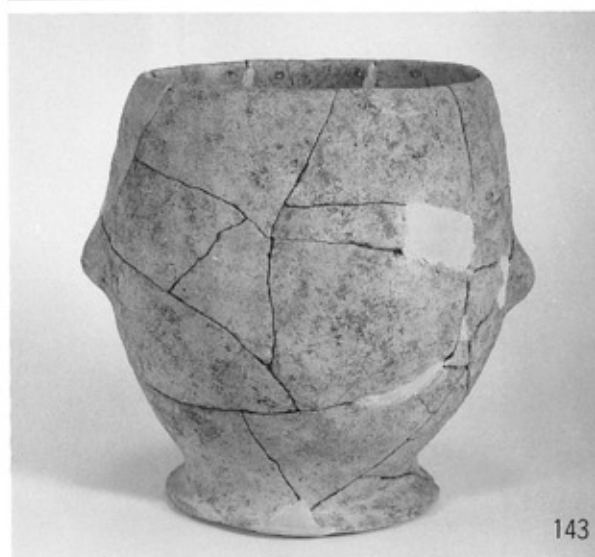
125



142



141



143



141
278



161



168



301

125 溝S D109, 141~143・278 2次溝S D3,
161・168・301 井戸S E7



174 井戸 S E 7, 193・195・201・202 井戸 S E 128,
その他 土坑 S K 6

秋 月 遺 跡

向陽高校危険校舎改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1994年3月

編集

財団法人 和歌山県文化財センター

発行

印刷 凸 版 印 刷 株 式 会 社
